

し爲久伯たゞ一人、魂魄脱殻の五體を机に持たせながら、更け行くまゝの物淋しき燈火に纏身みの溜息ためいき、ほつと吐く折しも、いづこよりか忍びて我を呼ぶ聲、

「御前さま、御前さま」

夢か、うつゝか、正しく聲は戀の主なれど、この深夜に前後の門を閉ぢ固めて高塀を廻らせし屋敷の奥深き我居室へ聲の通ふべき筈なし、とは思ひながらも不思議や聲は正しく戀の主なり、しかも續けて二度三度、

「御前さま、御前さま、雪で御坐ります」

はつと振り返りて耳を澄せば、いかにして今年やうく十六の浮世も知らぬ身が、この厳しき屋敷の奥深く此處まで忍び來りしぞ、居室に近き縁端の雨戸を優しき拳の音、ことごとくと打鳴らしぬ、

其十三

一切の家風は固より屋敷の結構まで舊大名の記念物といはれて、夜は猶更ら前後の門を閉ぢ固めつゝ上二番町の角を引廻せし四方は見上ぐるばかりの高塀、いまだ曾て場敷の盜賊さへ腕を組んで窺ひ得ざりしと聞き及ぶ河野家の要害堅固を、今年やうくこゝに十六の少女が山を出でて世にも人にも馴れぬ纖弱き初心の身を持ちながら、怖ろしや悪魔の空を通ふに等しく夜更け人定まりし後、そもく幾重の閉塞いかにして忍び入りけむ、

しかも初めて忍び入りし河野家の案内を手取る如く、闇の夜の星明りに庭傳ひの奥深く、築山泉水の樹間を自由自在に潜りぬけて、こゝぞ當主の臥房と知りし其縁端の雨戸を叩きしのみか、流石に四邊を憚りながらも聲は震はず正しく呼びし大膽不敵、もし呼ばれし爲久伯が戀に取られし魂魄脱殻の五體ならずば、おもはず總身ぞつと骨まで寒かるべし、

されど既に生來の本心を失うてより、寢ても覺めても夢うつゝの爲久伯、この描ける如き少女が深夜この要害を如何にして忍び來りしか、殆ど事實にあるべからざる此奇怪と此不思議さに一點の疑念を容るゝ餘地もなく、たゞ茫として隨喜渴仰の天女に呼ばれし心地、我にもあらず障子そつと引き開け縁側に起ち出で戸際に打屈みて、

「雪か、雪か」

「はい」

「今あけるぞ」

謙介の居りし頃は寢物語の伽ともせしが、其後は剛右衛門への面當に猶更ら誰彼の容赦なく、たゞ一喝の下に追ひ退けて人知れぬ物思ひに打沈む折柄、結句の幸ひ今は何物に心もおかず戸を開けて透し見れば、更け渡る春の夜の月なき闇に白く冴えし梅花一輪の面影、軒端に近

く匂ひぬ、

「や、雪」

忍び聲に思はず力を入れて手を差伸ばせば、その手首に無言のまゝ確と取付いて引上げられぬ、

戀は人間外の力、情は鬼神に迫る業、これが浮世を知らぬ二十四の華族生育と世間を知らぬ十六の山家生育、手と手を握り詰めて紙一枚の隙間もなく倚り添ひぬ、

はや既に忍び入りし身には、この曉いかにして歸るべきかの道も忘れ、はや既に引き入れし身には、この曉いかにして歸すべきかの恐れもなく、漏るゝ燈火を枕頭の屏風に打圍ひつゝ、たまの逢ふ瀬の膝に泣き伏せし姿を見れば、爲久伯が五體の骨節こゝに碎けて腸も溶け出しぬ、

たゞ現在の當主に生れし爲久伯の骨と腸ばかりか、恐るべし此少女一滴の涙に伯爵河野家の礎まで動き始めぬ、

其十四

をりく山より出で來りて内々そつと教へし父の業が、人しれぬ心の底に一物を抱ける松風軒の勤めし業か、但しは天性その身の生れながらに得たる怪物の本性か、始めて花の蒼を破られし十五の曉に玉の腕へ入墨せしほどの不思議を思へば、十六の今こゝに斯くあるべき怖ろしの一念、さらに何の不思議もなし、

しかも十四の秋まで山また山の奥に育ちて藤の蔓に脚下軽く岩間を踏み越え葛蔓に縋りて五體軽く溪水を飛び渡りし身が、いかに用心堅固とはいへ平地に建てたる角屋敷、幸ひの松が枝に下紐を掛け掛けて宙吊のまゝ人間細工の扉を乗り越ゆる如きは何の業でもなし、たゞ夜更け人定まりし後、その扉を乗り越えて忍び入りし大膽不敵の振舞が名筆の畫も及ばぬ此少女にありと思へば、六尺の毛脛男も舌を巻くべし、

まして忍ぶ戀路の束の間に東天の空白く、つきぬ餘情を閨の殘燈に惜みながら、酔へるが如き爲久伯を促して裏門の潜り戸を内より開かせ、たゞ一人また悠々と歸り行きし後姿を見れば、春の曙を名花一輪の音なき風に吹かるゝ風情、いよく冴え渡りて物凄し、されど魂魄ふらくと煙の如く脱け出でし爲久伯の身に取っては、この怖ろしき怪物の一念も、この大膽なる不敵の振舞も、この物凄き風情も、只これ美と愛の神業に等しく腸に染み込みて、情の露に身を浮くばかりの體、人生無量の快樂に茫として、もはや世の中の道理に責めらるゝ寸隙もなし、

その身に道理の入るべき寸隙なければ、その家に惡魔の大手を擴けて打通るべき大穴ありて

や、一日の朝、河野家の玄關に優しき女の聲、取次の老爺おもはず出でて見れば、例の雪女が花を欺く姿に香粉を粧うてすつと立ちぬ、

解けば身の丈にも餘る黒髪を文金の高島田に結び變へ、さらぬも天生の美質に眩きばかりの盛粧を極めて只一人、この晴がましき大玄關の眞正面を自己が生れし山家に等しく、をめす臆せぬ自然の態度に鬼挫ぐ體の色香を含んで立ちぬ、

「下六番町の、松風軒方に居りまする、雪と申しますもの、御當家の、御前さまへ、お取次を願ひます」

ふしぎや言葉の端も亂さず聲も淀まず身も動かす顔色も赧めず、眞白の両手を立ちしまゝの前に重ねて富士額の上目越に目禮しぬ、

其十五

天より降りしか地より湧きしか、歩み來りし足音もなき河野家の玄關へ忽然として現はれし萬綠叢中の紅一點、目も覺むるばかりの天生に華奢風流の香粉を粉ひし文金の高島田、加之も芳紀に似合はぬ自然の態度すつと立ちて聲さへ淀まず、下六番町の松風軒方に居りまする女といへば、取次に出でたる當家飼殺しの五十面、あつと驚いて其まゝ遁け込みぬ、

折しも玄關の次の室を生涯の天地と心得たる同じ鑄型の三四人、かくと聞くや否、おもはず顔色を失うて火の玉の舞ひ込みし如くに騒ぎ出し、その中の一人まづ塚本剛右衛門の私宅へ飛び込めば、生憎の不在に猶更の狼狽、さア事になりましたぞと無用の腕を組み始めぬ、

「いかゞ致したもので御坐いませう、第一あの塚本氏の不在が何よりも當惑、しかし御前へ申し上げては猶更の珍事出來、諺にいふ薪の油で、逆も火の玉のまゝでは濟まない大火になりますぜ」

「さア其點がありますから、なほ以て奥へは通せず折悪しく塚本氏は不在、こりやア此うちで面相の怖い聲の大きい者が苦り切つた權威で追ひ歸すより外ア御坐いますまい」

「ところが案外あの年齢で、あの美貌で只一人、この白晝この暗れがましい大玄關の眞正面へ機關人形のやうに濟まし込んで来るほどの怪物ですから、なか／＼油斷がなりませんぞ、兎も角まア、ちよいと其邊の隙間から御覽なさい、晝にも描けませんな、蟲も殺さない美顔で花も及ばない姿とは現在あれでせうよ、なるほど御身分さへなくばと御前の御心中お察し申しますな」

「これは怪しからん、今この場で、さやうの事を」

「さやうの事も斯やうの事も扱措いて、あのまゝ御玄關へ立たしては置けますまい」

「や、いッそ黙ッて、どうするか、當らず觸らずあのまゝ茫然と立たして置いては如何でせ

う、いくら怪物でも妖物でも、今年やう／＼十六か十七はまだ世の中に馴れない小兒同然ですもの、とり付く島がなくなれば自然立ち草臥れて歸りませうよ」

「これは名案、差當ッて手数の入らない妙計ですな、そのうちに塚本氏も歸られるでせうから、靜肅に寂然に、いづれも黙ッて黙ッて、しッ」

俄に額越の目と目を見合して首を縮めながら、ひッそりと四邊に人なきが如く息を殺しつゝ、物蔭の寸隙より差覗けば、玄關の眞正面に對うて立ちしまゝの身も動かさず、大地に根を持つかと思はるゝ花一輪の姿、ふしぎや自然に生れつきし風情を帯びて、ゆつたりと睡れる如き無心の中に何とやら物凄き執著の一念を現はしぬ、

其十六

やう／＼蒼の花瓣一輪、そツと開きしばかりの初々しき風情ながら、かねて聞き及ぶ御家騒

動の卵たまご子ここれかと思へば、はや既に火の玉の玄關へ舞ひ込みし心地、あの天女に等しき姿が秩父山中より出でしかと思へば、猶更ら不思議の物凄く悪魔變化の香粉を施して襲ひ來りし心地、うかく狼狽へて手を出すよりは當らず觸らず魂くらべに捨て置くべしと、大平無事の華族に養はるゝ羽織袴の智慧袋三四人、こゝに逸を以て勞を待つ軍法、息を殺し首を縮め目と目を見合はしながら、をりく物蔭の寸隙より差覗けど、さらに怨敵退散の様子なし。

折しも俄に顔色を變へて駈け込んだる松風軒、かくと見るや否、おもはず憤怒の聲もろとも無理往生に抱きかゝへて立去りしが、門前に待たせし車上へ押し乗せし後、あらためて靜に入り來りて、この古坊主そろく内玄關より這ひ上りぬ。

「や、宗匠、いかに勝手を存じて居られても只今のところ、さう無言に上り込まれては困りますぞ」

「お氣の毒ながら兎も角お退り下さい」

「もし差當つての御用でもあれば我々のうちへ書面を、このまゝの坐席では甚だ迷惑いたします」

松風軒、さも恐縮の體に慇懃の頭を下けながら、なほ進み寄りて耳にも入れず、じろりと額越に三人を睨みあけぬ。

「其後お出入禁制の松風軒、なるほど御門前へ立寄りましても恐れ入りますが、つまりは多年の御恩を蒙りました御當家のため第一また殿様の御爲に諸君まで是非、内々そつと申し上げたい義が御坐いまして、實は只今お玄關から無理に抱きかゝへて去らせました、あれが即ち例の新聞に出ました本人で、しかし其節は眞實この松風軒さらに存せぬ事、たゞ其

の後、殿様の御意として塚本氏の御子息に頼まれ、今日のところ露骨に申せば既に御手をかけられました外妾で御坐います、なれど根が素性の知れぬ山家生育、わけて雜誌と新聞に喧ましく騒がれて、お家騒動の卵子などと容易ならぬ風聞が世間に流布いたしましたため、物固い御家風として斯やうの次第になりましたが、さて諸君に御内談申し上げたいは此處で御坐います、いはゞ松風軒が最初より事を好んで御勤め申したといふではなし、つまり殿様が直接に山より御連れ出し遊ばして手前方へ預りました御秘藏物、しかし、それがため多年の御出入禁制ぐらゐるは固より覺悟の前、なほ此後とても實は陰ながら大切に御預り申す決心で居りましたところが、この松風軒ふと心付いて俄に身の毛が立つほどの怖ろしい理由が御坐いますから只今のうち、あらためて御預かりの議を御辭退申し上げます、もし従前通り御前へ出らるゝ身分で御坐いますれば、御前へ内々そつと申し上げけます

善ながら、それ叶はぬ以上、已むを得ず諸君まで此義お届け致します、元來が御當主の遊ばしたごと、善惡とも御當家の御處置あるべき道理で、この松風軒は此まゝの御出入禁制で今後の一切を御免蒙ります、つきまして御参考のため、ちよいと御内通いたして置きませすが、あの御秘藏物あれば尋常の人間に出来て居らないやう考へます、まづ其一例が秩父の山を出て僅に半年たよぬうち、殿様の御手をかけられた動かぬ證據に玉のやうな十五の腕へ、恐れながら爲久といふ二字の入墨いたしましたほどの怖ろしい怪物で、まだ其上の物凄さは諸君、夢にも御存じ御坐いますまいが、この堅固な御屋敷の高塀を乗り越えて人の寢静まった深夜、そつと殿様のお臥房へ三四度も忍び込んだといふ事、近日この手前が始めて知りました時の驚愕、しかも今日は白晝たゞ一人、この御玄關へ押し掛けたといふ事を聞くや否、もはや堪らず後を追ッて駆け込みました次第、此後いかなる事を致します

か、考へて見れば見るほど怖ろしくて、逆も老考れた手前などの手に叶ひませんから、幸ひ本人を御覽になつた今日かぎり、あらためて諸君の御處分を願ひます、や、さてく世の中には不思議も不思議、どう首を捻つても事物の道理と人間の理窟に合はない怖ろしい天生のあるもんで御坐いますな」

現在その本人の年齢にも美貌にもあるべからざる大膽不敵の振舞を眼前に見て今また現在その本人を今日まで包み秘せし松風軒に事實を明して喝かされし三人、あつと呆れしまゝの顔色を失ひぬ、

其十七

今年やうく十六の花を欺く本人たゞ一人、白晝この大玄關の眞正面へ押し掛け來りて凡そ一時間も動かざりし事、お出入禁制の松風軒が俄の不意に驅け込んで今日まで包み秘せし委

細の白狀、玉の如き十五の小腕に爲久の二字を入墨せし事と、人知れぬ深夜そつと屋敷の高塀を乗り越えて忍び入りし事を打明せしと聞くや否、流石の塚本剛右衛門、ぞつと思はず總身に水を浴びし心地、赤く光りし禿頭の色まで失ひぬ、

もはや斯く聞き及びし上は御家騒動の卵子いつしか殻を破つて形を備へ翼も生えたり、加之も現在その本人を今日まで懷中に忍ばせし松風軒さへ、俄に行末を恐れて驅け込むほどの珍事出來に、あの一子奴うかく何を仕をるかと思ひし其夜十時ごろ、謙介そつと私宅へ忍び歸りぬ、

もし今日この事さへ聞かすば、大喝一聲の外に用なき謙介なれど、實は思案に餘りて心の底に待ち受けし剛右衛門、奥の一室に呼び込んで悲憤の老眼に睨みながらも、おもはず膝を進めて聲を潜めぬ、



「謙介、いかな汝も今日こそは何か、確とした申譯があつて歸つたらうな、まさか只、父の顔を見たいばかりで来たのではあるまいな」

「は、さう承りましたは猶更ら、恐れ入りますが、實は今日、かやうな事になりました以上、及ばすながら、もはや謙介が差控へて居れない筈の場合と心得まして、謝罪の上の謝罪かたぐい」

「よく聞け謙介、世間に現はれると現はれないのみの事、いづれの諸侯方にも、内々その大小に従うて、必ず御家騒動といふものはあつたが、御當家に限つて、御先祖以來さらに一切、さる思はしい不吉もなく連綿と目出たく御繁昌を傳へて来た今日、わけて昔の大名と違ひ萬事の御家風お手輕になつた華族の今日、かりそめにも御家に瑕瑾が付いて濟むと思ふか」

「は、一言も御坐いません次第で」

「昔ならば此の剛右衛門、鞞腹を搔き切つて申譯の一端とも相成るが、今日の時勢に家扶が切腹沙汰、これだけでも既に御家の亂雜を世間へ現はす基となるぞ、まして素性も得知れぬ怪しい乙女を山の奥から連れ出して、きけば其、その腕に御前の御名前が入墨してあるとの事、第一、世間普通ならば今年やうく十六まだ乳臭い筈の小娘が、深夜そつと屋敷の高塀を乗り越えて御臥房へ忍び込んだとは、不思議も不思議、怖ろしさも怖ろしい女、大膽といはうか不敵といはうか、たとひ自然の天生とはいへ言語道斷の怪物、かやうな女が白晝お玄關の眞正面へ憚りもなく正體を現はすやうになつては、もはや逆も尋常の手段で防ぎかぬぞ、現在それを今日まで慾の皮に包み秘した松風軒さへ俄に怖氣が付いて驅け込むほどの始末、その起因は謙介、汝だぞ、どうする」

「は、いちく何とも以て、今更ら申し上げやうもない儀で御坐いますが、外の事は扱措き、それほど怖ろしい女の、いはゞ魔物の性根を備へた女の腕へ、どういふ御心の狂亂で遊ばしましたか、こればかりは謙介も今日まで夢さら存せぬ事、爲久といふ二字の入墨が御坐います以上、その女を無理に遠退けましては、却つて世に申す藪蛇の恐れあるかと考へます、つきましては差當つて謙介の一工夫、あらためて御屋敷へ入れる事も出来ませんから、いッそ、旅へ連れ出しまして、無論、どこまでも謙介が萬事の祕密を心得た體で、御前は内々そつと後より御越になる筈の心算で、つまり本人を東京以外、しかも二三百里の外へ連れ出した後に臨機應變の處置、と申したところで別段これといふ妙計も御坐いませんが、つまり因果を含めて幾何の金子を與へ、幸ひ實父も御坐います事、その父を呼び寄せて動かぬやう眼前の利慾責めに談じ込めれば結局、手輕にまるるかと考へます、そして御前へは

元來の淫婦に生れついた女、ふと他に男を拵へて行方しれず遁けた體に申し上げれば、これまた自然に思召の薄くなる道理、よし充分に行かすとも、まづ第一あの腕の入墨を消すだけの事は謙介、謝罪の證據として、きつと仕遂けます決心、如何で御坐いませう」

其十八

氏素性の得知れぬ山家生育といへど、花柳の巷に香粉を競うて色を賣る歌妓娼婦の類にあらざるのみか、もしこれを山靈水伯の精とすれば俗界の金殿玉樓に生れしよりも更に幾層倍の淨清無垢、たゞ雜誌の寫眞版に曝され新聞の艶種に唄はれ世間の風聞に上りしといふだけの事、それさへ骨董物に等しき昔氣質の頑固一徹より見ればこそその奇怪、そもく人間の種類に元來の尊卑なく戀愛の情致に根抵の上下なき今日、咄々いづこの誰に對うて何の憚るところあるべき、まして當主が多年の沈鬱性も現在これがために治癒の効果あらむとする折柄、

叨りに角を矯めて牛を殺すの愚に歸せむよりは、寧ろ華族の身を以て神聖の戀を山間の少女に求めつゝ、生來いまだ曾て俗塵に汚されざる美の極を妻とするの快事あらしめたと、實は本人の爲久伯にも勝して熱中せし塚本謙介ながつ、十五の小腕に入墨せし大膽と十六の身に深夜の高塀を乗り越えて忍び入りしといふ怖ろしき振舞を聞きし後は以上の主義も議論も一時に消え失せて極端より極端への逆戻り、おもはず顔色を變へつゝ、呆れ果てぬ、しかも十四の秋まで猪猿と等しき山中に育ち、浮世に出でし後も人に交はらぬ數寄屋の奥深く養はれし日蔭の身が只一人、大の男も聊か憚るべき白晝あの太玄關の眞正面へ押し掛けて、やうく蒼を開きしばかりの花の姿に目色も變ぜぬ自然の態度、大地に根を持つが如く、呼べど應へぬところに一時間も悠々と立ち盡せし天生の度胸、なるほど聞けば聞くほど怖ろしき本性、たゞの人間普通に生れし女でなしと、謙介いよく薄氣味わるくなりぬ、

事の原因に立戻れば皆これ我身の罪、わけて父が老體の苦惱を思へば猶更ら以て不孝の至極、父祖傳來の主家に對しては現在不忠の結果、もはや此上は今後の成行を一身に荷うて眼前の毒物を掴み出すより外に申譯なしと、人しれず父子が心を合して用意の五百圓を懷中に捻ぢ込みつゝ、わざと何氣なく下六番町の松風軒へ立歸れば、折しも主人の宗匠いづれかへ出て例の本尊たゞ一人、流石に今日のありし事を思うて何とやら打ち沈みしが、わが居室と定められし床の柱に背を持たせつゝ、すつと水際の立ちし襟首を垂れながら、伏目勝に冴え渡る腫を放ちて無心の燈火を心ありけに見詰め、漆の如き黒髪を鬢を洩れて描ける如き眞白の半面を現はせる風情、嗚呼この天女に等しき玉の肌に猛火よりも怖ろしき不思議の大膽を包んで夜更け人定まりし後、あの用心堅固の高塀を惡魔の通ふ如く飛び越ゆるかと思へば、謙介ぞつと骨まで寒くなりぬ、

されど今更ら免れぬ當の敵手となりし覺悟の謙介、まして主人の宗匠が不在を僥倖、腸を据ゑて聲を潜め、

「お雪さん、ちよいと此方へ、あの數寄屋まで、實は御前から内々の御傳言が御坐いますから」

きくや否、不意に驚く體もなく、はいと軽く答へて靜に振り返りし面を見れば、天生の美顔いよく、冴えて正しく名筆の畫より脱け出でたるが如し、

其十九

美の極に作られて山靈水伯に守られし塵外の神祕を、たましく人間の手に引き出して汚れたる色情の閨に弄びしがため、容貌は其まゝの春を迎へて自然の名花いよく、美に咲けど、目に見えぬ心の底は既に神の憤怒を宿して俗界の惡魔と化せし乎、さなくば十四の秋まで山の

奥に育ちし少女の身として、はや十五の曉に人しれぬ戀の入墨すべき筈なく、浮世に出でても風に當らぬ日蔭の身として、怖ろしや十六の春に深夜の高塀を乗り越えて忍び入るべき筈なく、おもへば思ふほど逆も尋常の女に出来得べき人間業でなし、されど斯くなりし現在の罪を荷うて、もはや免れぬ眼前の責めに當りし塚本謙介、今は君のため父のため我身を顧みる違なく、たとひ鬼でも蛇でも組んで落さむとの覺悟、内々そつと數寄屋のうちに呼び入れつゝ、四邊を憚りながら聲を潜めて語りぬ、

「今、いふ通りの理由ですからね、よく考へて御覽なさい、なか／＼此まゝでは逆も無効ですよ、いくら御前が貴女を戀しく思召しても、さう手軽く自由に出られない御身分が、今日のやうな事のおつた上は猶更ら屋敷の方で萬事に就いての用心しますからね、また貴女にしても今後、たとひ、どういふ智慧を絞つて、前後も顧みないほどの一生懸命になつた

ところでも、はや従來のやうに御顔を見る事が出来ませんぜ、しかし最初から今日までの、中間に立って、當家の宗匠よりも貴女の御父よりも一層、深く委しう御前の御心中を吞み込んでるものは、この謙介たゞ一人です、ね、そこで先刻、そつと人の知らないやう御前の御目にかゝって、此後どう遊ばしますと伺ひました、ところが御前の思召は斯うです、かういふ事になつた以上、進も尋常の手段で逢へないから、いッそ汝が雪を連れ出して、この蒼蠅い面倒な東京を離れて、汽車の通じた、そして夢にも人の氣の付かない、便利の宜い田舎の都會で待つて居れ、すぐ後から乃公も忍んで出て二三箇月の間、誰に憚らず心置なく面白く愉快に遊びたいとの御意です、就いては何處が宜からうと、いろく御相談に預つた結果、まづ東海道の線路で濱松と極りました、無論、宗匠にも父御にも濱松へ著いた上、手紙で委しく内通するとして、それまでは御前と貴女と謙介と三人の外、いかな

る者にも知らさない心算です、實は既に其用意として金子も充分に戴いて來ましたからね、いはゞ御身分を捨て、貴女のため、現在こゝままでになられた御前の思召を有難く、あつく身に染みて、お受けなさらないと濟みませんぜ、よろしいか、その他の一切は此謙介が萬事、行末の事も考へて居りますから御安心なすつてね、決して御心配には及びませんよ」後日の善悪は兎も角、差當つて眼前一步の策略、謙介こゝに人しれぬ度胸を定めて、見れば天女に等しけれど思へば怖ろしく天魔に等しき此怪物を、内々そつと誘ひ出して遠く都門の外に捨て去らむとす、

其二十

いかに怖ろしき大膽の天生とはいへ、いかに物凄き不敵の天生とはいへ、どれほど世間普通

も物凄き不敵も殆と不思議の魔力に似たる振舞も、生來こゝに始めて覺えし戀の一念に驅られて善惡邪正の分別なく、加之も近く目と鼻の間に元來の野性を張り切つて居る矢の的あればこそ、もしこれを遠く都門の外に誘ひ出して覘ひし的を取外せば、つまり浮世を知らぬ十六の小娘、まして四方の縁なき旅の空、猫の子を捨つるよりも易かるべしと、塚本謙介いよく度胸を定めぬ、

さらぬも天の生せる自然の美玉、いづこの里にも往來の歩を停めて萬人の視線に立てば、幸ひ却つて常著のまゝの夕暮、折しも松風軒の主人夫婦が珍客に忙しき油断を見濟ましつゝ、そつと連れ出して見當り次第の辻車に飛び乗りぬ、

見れば世に二個あるまじき珠玉を野に捨つるが如く勿體なけれど、思へば行末の怖ろしき惡魔を欺いて追ひ拂ふが如く、二臺の辻車を宵闇の宙に飛ばしながら、眞一文字に新橋のステ

ーションへ向ひぬ、

事に當りて物に激すれば脇目も觸らぬ幕地の一念、自然に我を忘れて猛火を吹くが如き天生ながら、現在こゝには前後の差別なき初心の戀に吊り出されし身、みすく謙介の術に落ちて遠き旅路の空に捨てらるゝとも知らず、今日まで浮世を離れて山家と人訪はぬ數寄屋の奥深く育ちし目に、ぱつと眩ゆき電光燦爛たるステーションへ連れ込まれて、あはれや小兒の母に纏ふが如く、おもはず謙介の袖に縋りぬ、

「かういふ混雜ですからね、一生懸命どこも見ないで只、しつかりと謙介に附いて在らっしゃいよ、まだ汽車へ乗り込むには、一時間ほどありますが、先刻あのみ飛び出したんですから、嘸お腹が空いたでしょう、何か喫べませうか、それとも菓物でも買つて這入りませうか」

「いゝへ、何も、喫べたく御坐いません」

「ぢやア途中で、宜い時分に辨當を取るとして、時に貴女、かうして来て、どういふ氣がしますね」

「どうも御坐いませんが、あんまり人が多くて、妾の顔ばかり」

「はゝゝゝなるべく影の方の薄闇いところへ寄って在らっしゃい、貴女的美顔が目立つからですよ、此方へ、此方へ、それ脚下に氣を付けないと、さア切符を買ひますから、そつと袂を持つて、他見をしては、いけませんよ」

其二十一

生れながらの一念、かうと思へば炎焔を吐いて闇夜の天を駈け行く悪鬼に等しけれど、餘所の見る目は風にも堪へぬ名花一輪に露を宿せし風情、現在その身さへ心の底に恐ろしき魔界

の本性ありと知らねば、まして事なき門外一步の浮世に出でては東西も得知らぬ初々しさ、白晝の如きステーションの電燈に射られて思はず薄闇き方に身を反け、織るが如きブラットホームの群集に揉まれて謙介の袖に取付き、やうく手を引かれつゝ新橋の夜汽車に乗り込みぬ、

數寄屋の奥深く一物を蓄へし松風軒も、元の山家に後日の榮華を夢みる父も、現在の戀に身を忘るゝ爲久伯も、かくとは知らぬ汽笛一聲、たゞ知るものは案外の塚本剛右衛門、その一子の謙介こゝに内々そつと以上三人の鼻毛を抜いて、おもはぬ油斷の隙間より首尾よく偷み出しぬ、

また本人も偷まるゝとは知らず、わけて欺さるゝとは知らず、猶更ら捨てらるゝとは知らず、すぐにも後より我影を慕うて戀人の追ひ來る氣、この濱松とやら都門を隔てし旅の空を心の

まゝに嬉しき情の宿とする氣、かくなりし上は以前に増して浮世の力草この謙介を何處までも兄と思つて取纏る氣なれど、馴れぬ車中の人目を憚りつゝ片隅に身を潜めながら、をりをり恥かしの袖に溢れて笑渦の露を漏らす風情、さらに何の罪もなし、

されど今夜の樂しき夢を乗せて濱松へ著きし曉、もし始めて我身の儉まれしを知り欺されしを知り捨てらるゝを知りし時は、この罪なき笑渦の露、忽ち心の底に潜める濁浪の源泉を渦巻き起して如何なるものとなるべき乎、

兎も角も此汽車の濱松に著くまでは、二等室に滿載されたる乗客の視線、またゝきもせず一隅に對うて魂魄を奪はれし體、美人も美人かくまでの美人が世の中にあるものかと、おもはず謙介を嫉妬的の的に取つて睨み付けぬ、

折しも夜の十二時を過ぎつゝ、はや御殿場に近づきしころ、謙介そつと振り返りて聲を潜め

ながら、

「そろく草臥れて來ましたらう、どうせ横にはなれませんが、謙介の背後に寄り掛つて、

うとくとなさい、そのうち夜が明けて著きますからね」

「いゝへ、少しも睡くは御坐いません」

「でもね、いつまで、さう行儀よくして居られないから」

「人が見て居りますもの」

「なアに誰が見たつて構ひますものか、遠慮なく、その毛布を身體に巻き付けて」

「それでは、寐ませんが、少しばかり樂にして戴きませう」

萬綠叢中の紅一點、そろりと謙介の背を楯として衆目に隠れながら、手提鞆の上に毛布の端を打重ねつゝ、雪を欺く富士額を兩手に埋めて居坐のまゝ打伏せしが、いつしか次第に身を



傾け、果は謙介の肩口に他愛なく倚り掛りて睡りし體を見るや否、おもはず叫ぶ奴あり、  
「畜生ッ」

其二十二

どこに轉がしても珠玉は珠玉、いかに包めど自然に匂ふ蘭麝は蘭麝、まして乗り込めば寢ろより外の用なき夜汽車の片隅に目も覺むるばかりの名花一輪、すつと冴えて際立てば、新橋のステーションを夜行の十時に發してより、終夜じろくく一室の乗客に奇異の感と嫉妬の眼を注がれつゝ、さらぬも心に何とやら我身を咎めし謙介、その朝の七時に濱松へ著くや否、物に追はれて遁ぐるが如く飛び降りぬ、

されど汽車といふもの山深き多摩川上流の日向和田より僅一二時間の青梅線に乗りし外、生來こゝに二度目の汽車、しかも晴れがましき人混の東海道線に一夜直行の夢うつゝを絶え間

なく揺り抜かれて、馴れぬ旅路の朝風に凋れし花の風情、いと猶更ら群集の人目に立ちぬ、

濱松のステーション前、すらりと見渡しながら、わざと棟低く入口狭く人影薄き旅宿を選びぬ、

男振も風體も見苦しからぬ謙介と、さらに飾らぬ常著のまゝの姿ながら、天の生せる自然の容色、あまり一方に高く飛び放れて浮世の相應を失へば、近ごろの若夫婦とも見えす元來の同胞とも見えす、さりとて主従でもなく戀でもなく、どれほど人を見馴れし家業の目にも、こればかりは思はず不審の眉を擧めしが、正しく上客と見られて特別の待遇、しかも其不審を込めし一種の氣轉、わざく中庭を隔てし奥の離れ座敷に件ひぬ、

「や、兎も角まアこれで、やうく少しは氣が落著きましたよ、しかし夜通し馴れない汽車

で第一あの人混みで嘸お疲勞なすツたらう、今に朝飯を持ッて來ますからね、すぐ其後で湯を立てさせませう、湯に這入ると身體が自然に和らいで暢々しますから、その上で今日は前夜の寐足りないだけ、ゆつくりと充分お休みなさい、ね、どんな人でも旅といふものは氣まゝのしたい三昧で、誰に遠慮のないところが價値ですよ、はゝゝゝゝゝゝ」

「塚本さん、これが濱松といふ土地で御坐いますね」

「さやう、濱松です」

「それでは、お後から、こゝへ入らッしやいますのですね、今日で御坐いますか」

「今日、といふ、わけには、しかし今夜お乗車になれば、今朝こゝへ著いたと同じことで、

明日の朝は必ず」

「明日の朝、きッと入らッしやいませうか」

「まづ大抵、お越しになる筈ですが、あの御身分ですから、事に依ると二三日」

「その間、妾は、こゝで何を致して居りませう」

謙介いまだ心の底に蓄へし一物の端も見せぬに、はや物に押へられぬ自然の氣配、そろく手に餘りかけぬ、

其二十三

元來かくなるべき筈とは夢にも思はざりしが、現在かくなりし上は脱れぬ我身の罪業もろとも捨て置けぬ本人を背負ひ込んで眼前の一策、やうく首尾よく濱松まで連れ出せしものよさて猫の子でなし狗の子でなし、わけて天生の容貌いづこの里にも人の目に立つのみか、また自然の恰憫と一途の大膽、うかくすれば身動きならぬ真正面より咽喉笛に喰ひ付かるべしと、今更ら謙介こゝに思案の腕を組み始めぬ、

知らぬが佛とは世諺でなく、けに見る本人の雪女が風情、たゞ爲久伯が忍んで我影を此處に追ひ來るとのみ思ひ詰めての一念に氣を引立てつゝ、馴れぬ夜汽車に一夜を揺り通されし疲勞も覺えず、得知らぬ他國の空に引き出されし旅の身とも思はず、もの珍らしげに障子の隙間より入り來る旅客を差覗き、嬉しげに窓より四邊の氣色を打眺め、はや其日も暮近く湯に入りて燈火の下に坐せし姿を見れば、名花の面影いよく冴えて露を宿せる如し、

「塚本さん、明日の夜か、明後日の朝は是非、入らっしゃいませうね」

「はゝゝゝお起しになる事は、無論、なりますがね、さう確乎に問ひ詰められては聊か困りますな、何分あゝいふ御身分で、第一この頃あゝいふ結果になつてる折柄ですもの、いくら飛び出すやうに思召しても、どうせ、こゝ三四日ぐらゐは」

「でも貴君、すぐ後から、と仰しやつたから、慌てゝ、こんな常著のまゝ、それなら其心算

で、かう早く三日も四日も先へ來なくつて宜しいに」

「さ、そこが萬事の都合ですよ、もし御同伴にでも出て御覽なさい、それこそ大變、すぐ怪しまれて屋敷の追ッ人が驅け付けなとも限りますまい、ね、ですから兎も角まづ此處まで、また御前は御前で別に何氣なく、つい御散歩といふ體にして、つまり現在の宗匠にさへ内々そつと出たくらゐるですもの」

「塚本さん、妾、それで猶更ら心配いたしますの、妾と貴君と出た事は其夜、直接、お師匠さんに知れて居ませう、さうすれば、その騒ぎから、お屋敷の方へ、もし、お屋敷へ分つたら、却つて御前様が出られなくなるかと」

「や、なるほど、なるほど其邊も、しかし大丈夫ですよ、はゝゝゝ大丈夫、萬一、もし萬々一、さういふ事で三四日の後、まだ御前が入らっしゃらない時は、そつと謙介だけ東京へ

歸ッて何とか工夫した上、必ずお連れ申して來ますからね」

「いや、妾こゝで一人、残ッて居る事は嫌、その時は、また隨いてまゐります」

十四の歳まで秩父の山中に育ち、やうく浮世に出でても僅二年越、しかも人訪はぬ數寄屋の奥深く秘め置かれし身ながら、ふしぎや自然の美に伴ふ自然の才氣、どこやらに一節びんと強ねたるところありて甘き口車に乗らねば、こいつ油斷がならぬと謙介いよく恐怖を抱きぬ、

されど三四日は本人こゝに承知の上の大丈夫、その間に一工夫ありと、さあらぬ體に其まゝ夜の十時を過ぎし頃は、いつしか次第に覺ゆる身の草臥と、また互に顔を見合して何の用なく、いざ寐るとなれば生憎八疊一室の離れ座敷に臥房二個、

其二十四

世間を茶にして寂びたる風流の業ながら、四疊半の一室に納まり兼ねし太い心の古坊主、その松風軒が家法傳來の名物道具よりも大切にせし近來の珠玉を宵闇の油斷に失うて、寒熱の地獄極樂に通ふ茶柄杓の中折、今日までの湯加減も俄に葦屋釜の底ぬけし心地せしのみか、その生物は尋常の紛失でなく、これも後日の方便と深い利慾の八窓より我方へ引き入れし謙介の手に偷み出され、あつと呆れ果てぬ、

かくと聞きし山家老父も實は浮世の中央を覗ひし奴、飛ぶが如く日原の里より馳せ來つて松風軒へ躍り込めば、まちうけし古坊主また新らしき一工夫、二の矢を射るべき心の的を付けて互の密談、俗に遠き風雅の道を賣物にする曲者と人に遠き山の奥を看板にする曲物なり、「いやはや、儲かうなると差當ッての貧乏圖、四方八方へ申譯のないのは只この坊主ばかりで、しかし大體の根は安心して居て下さい、あの謙介といふ男は普通の食客と違ッて、い

はゞ或一點まで此方の味方も同然、第一が人目を忍ぶ戀路の呵しい理由でもあれば前以て知れる筈、その氣振もなくツて俄に斯なツた以上、こりやア却ツて面白い狂言の筋書になりますよ」

「でも御坐いませうが、彼の父は私で、つまり私が大事の娘を奪られたので」

「さゝそこを、そこが却ツて幸福の運を早める理窟で、あの男の身に取ツては父祖傳來の恩を荷うた當主の愛妾、これがために多年の沈鬱性も一時に癒ツたといふ名薬、その愛妾を偷んで眼前その名薬を毒薬に差支へるほどの男でないと見れば、大略の呼吸が分るでせう、まして謙介の父が昔氣質の一徹、屋敷中へ振り廻す、荒神様だから、その一子が生じた業は正しく一子のした業で、偷まれた本人が此方の物といへば猶更の事、はゞ、誰か細工にせよ裏表どちらから廻ツても大丈夫、もはや歩調を早めても宜しいぜ」

「へエ、しかし私には先刻からの御言葉、何だか妙に、きれぐのやうで、聊か分り兼ねますが、全體この上、この私は如何なりませう、また娘は如何して戴けますものか、その邊を委しう、よく會得いたしまするやう、何分、人様に馴れない山家者で」

「はゞ、なかく油斷の無い底のある人だ、この茶人がこゝまで開いて言へば、もう呑み込んで宜かりさうなもんだが、しかし本尊の持主、や、無理のないところも承知しました、ぢやア改めて露骨に談ませうが、その前にちよいと値を入れて見たい、はゞ、失禮ながら賣物として幾何ですな」

「まづ三萬圓」

「えッ、三萬圓」

「鑑一文の掛値なし、今こゝで三萬圓も下さりやア、呑み込めぬところを呑み込みませう、

は、山家者は慾が淺く、無効ですよ、は、三萬圓、三萬圓」

其二十五

松風軒は手品の種を盗まれ、日原の老爺は生涯の福を奪はれて、あつと一時に呆れ返りしが、その偷み手も奪ひ手も河野家の礎に立つといふ昔氣質の角柱、あの塚本剛右衛門が一子の謙介と知るや否、固より風流を賣物の太い奴と正直を看板の細くない奴、始めは互に睨み合つて膽玉の目方を量り合ひながら、後には思はず音なき手を拍ち合つて同じ穴の狸となりぬ、されど塚本剛右衛門は反間苦肉の計策を施しつゝ、我子のためには一旦の過を悔いて由來の罪を償はせし心地、また主君のためには眼前の禍を轉じて御家騒動の卵子を踏み潰せし心地、人しれぬ内心の微笑を祕して古風の老顔いよく四角張りぬ、たゞこゝに爲久伯は、さらぬも不思議の魔力に本心を奪られて魂魄脱殻の五體、ほつと夢う

つゝに我を忘れし折柄、その戀の本尊が俄の不意に消え失せしまゝ、行方も知れずなりしと聞いて、無残や今まで打沈みし元來の神經質を毒汁の針もて隙間なく刺されしが如く、全身の血の氣は一時に狂ひ出しぬ、

されど戀の本尊たゞ一人にあらで、同じ其夜の紛失物に例の謙介ありと聞いて、狂へる中にも何とやら後に残せし情の絲に繋がるゝ心地、さては其後の堪へぬ思情に迷ひて哀れの影を追うて出でしか、もし相伴うて出奔せしとならば、逆も逢ふ瀬の自由ならぬ此頃の苦しさに内々そつと謀し合して、いづれか人目に立たぬ忍びの宿を定めし上、竊に我を呼び出さむとするか、いづれにしても我より外に男なきものと我より外に主人なきものと、男女の別こそあれ同じ心の二人もろとも同じ宵闇の家出は却つて我への志を運びし業、今かくと生命の露に音なき月下氷人の通路を待ちこがれぬ、

あはれ大名華族の一粒種に生れて門外一步の浮世を知らぬ爲久伯、まして怖るべき戀の曲物は俗界凡夫の牛血に舌鼓を打って世の中の義理人情を餌食にするものとは知らず、天女が紫雲に包まれて我を火宅の宿の外に待つとぞ思ひぬ、

さても東海道とうかいだうの濱松はままつに旅たびの空そらの肌寒はださむき夜よ、いつしか更ふけ渡わたりて人定ひとさだまりし後のち、中庭なかつにわを隔へだてし飛石とびいし傳つたひの奥深おくふかき離はなれ座敷ざしき、ひっそりと隙間すきまもる風かぜさへ通かよはぬ八疊やふひさま一室いつしつのうち、おほろに打うち沈しづめる燈火とうしの下もと、この爲久伯たのひさはくの外ほかに男おとこなきものと、この爲久伯たのひさはくの外ほかに主人しゅじんなきものと、そも

いかなる人生じんせい意外いがいの魔力まじりよくに取控とりかひがれし乎、

突如つじょとして爲久伯たのひさはくの手てに濱松はままつより差出さしだせし一片ぺんの郵書ゆうしよは來りぬ、加之しかも悲憤いかりの滿面まんめんに朱しゆを注そいで引裂ひきさくべき筈はずの塚本つかもと剛右衛門ごうゑもんが無事むじに取次とりついで平氣へいきに差出さしだしぬ、

其二十六

相傳さうでんの主家しゆかに對たいしては君きみを魔道まどうに引入ひきいれし獅子しし身み中の蟲むし、一人ひとりの父ちちに對たいしては今日けふまで無事むじに勤つとめし忠節ちゆうせつを踏ふみ潰つぶせし不孝ふかうの奴やつと、昔氣質むかしかたぎの一徹いつてつに父子おやこの縁えんを切きつて叩たたき出だせし塚本つかもと剛右衛門ごうゑもん、平生へいぜいは人ひとより謙介けんけいの名なのみを聞きかされてさへ、はつと思おもはず心こころに恥はぢて坐ざを起たつほどの古風こふうに似合にあはず、過誤あやまちの功名こうめいに等ひしとはいへ現在げんざい當主たうしゆの愛妾おもひものを偷ぬすんで出奔しゆつぽんせしといふ風ふう聞きの今日こんにち、その謙介けんけいが濱松はままつよりの郵書ゆうしよを平氣へいきに取次とりついで差出さしだせし心中しんちゆう、正ましく反間はんかん苦肉くにくの一策さくこゝに成なれりと思おもひ込こみぬ、

また爲久伯たのひさはくの身みに取りては月下げつげ氷人ひよかみの通路かよひぢに等ひし戀こひと情なさけの絲筋いとすぢ、人知ひとしれぬ心こころの底そこに搦からみ纏まとうて、今いまかくと生命いのちの露つゆに待まちこがれし折柄せりから、禿頭はげあたまの四角張しかくはつたる剛右衛門ごうゑもんが無事むじに取次とりついで差出さしだせし不審ふしんの違いもなく、とる手ておそしと片手かたてに搦つかみしまゝ奥おくの一室いつしつに駈かけ入いつて、内ない内ないそつと披ひらき見みれば、幾重いくへにも卷まき込こみし謙介けんけいの筆すぢ、珠玉たまを聯つらねたる心地こころぢして讀よみ下くだしぬ、

拜白、恐れながら不意の旅中に御坐候故、わざと委細の御免を蒙り候上、只こゝに事の大略のみを申し上げ候。

第一は思召のほども伺はず斯く突然の出奔、わけて例の方を誘ひ出し候事、定めて人々より種々の取沙汰も可有之、猶更ら以て恐縮の至極に存じ候へども、もはや今日の都合と相成候上この義に就いて一言の申譯もなき人外の結果を呈し候罪惡の本人この謙介の申譯は却て御憤怒を重ね候のみならず、諺にいふ飼犬の反嚙に等しき振舞と相成候間、たゞ事實の成行を畜類同然の口より便宜上の文字に現はして申し上げ候。

- 一、生涯の御暇を謙介の身に下し賜はりたく謹んで奉懇願候事、
- 一、雪女は改めて謙介の妻に下し賜はりたく伏して奉懇願候事、

固より君父を捨て、人道の外なる終生の魔界に墮落いたし候ほどの謙介、右二條の罪惡

を白狀仕り候以外、さらに申し上げべき文言無之候、

御前

謙介

あはれや爲久伯、みるくうちに至るに全身の生血を絞り取らるゝが如く、さらぬも神經質の青白き満面さつと人間の色を失うて戦く兩手に引裂くや否、前なる火鉢に投げ込めば、燃え上る黒煙の中より物凄き怨恨の眼球きらりと光りぬ、

其二十七

ことし六十三の禿頭を振り立て、河野家の角柱を守る昔氣質の塚本剛右衛門、ことし五十六の胡麻鹽頭を振り立て、秋父山中の日原より浮世の中央を覗ふ山家老爺、互の心に人しれぬ一物を抱きながら、こゝに始めて顔を見合せつゝ膝を突き合しぬ、



「これは始めて御目にかゝります、私が當家の塚本といふもので、しかし何の御用で來られましたな、むづかしい挨拶は無用として、その用事の筋だけ手短かに伺ひたい、お見掛よりも案外、暇のない忙がしい身體でな、は、は、は」

「いや恐れ入ります、それでは萬事御免を蒙りまして、手短かに申し上げますが、私は多摩川の上流で秩父の日原から伺ひましたもの、と、これだけ御耳に入れますれば大抵、御存じの筈に心得まして、へい」

「は、ア、多摩川の上流で秩父の日原から來たもの、や、どう考へても此方さらに覺えが御坐らん、心當りが無い、もし間違ひではあるまいかな」

「は、は、は、これが新路の借屋建築とか一蓮托生の裏長屋なら、なるほど狼狽へ間違ひも戸迷ひも致しませうが、お屋敷も御屋敷、上二番町の角を引廻した高塀づくりの大門結構、

いかな山家者も盲目の杖も一寸の徒勞なく眞ッ直に參りました、へい、また殿様の御名前を出しましては恐れ入りますから、わざと貴老様まで伺ひました理由で御坐います、へい、しかし委しく申し上げますれば、わざと山の奥から引ッ張り出されて本人まだ小兒同然の年齢を無理往生に御前の御慰みとなつた妾の父で御坐います、つきましては御當家お出入の茶の宗匠が取次で今日まで月々十圓づつの御手宛を戴いて元の山家に居りましたが、よく考へて見ますれば父一人、子一人、どれほど娘が結構にして貰つても行末の出世になりまして、やはり父子一所に暮したところから、實は唐突で御都合のほど如何かと存じましたが、今日あらためて御暇を戴きに參りましたので、へい、どうか兎も角も娘を此處へ御呼び出し下さいませう、願ひます、私は斯う思ひましても、また本人が何と申しますか、猪猿の棲處に近い山の中で峯の嵐と谷水の音に育ちました身が、急に人間界の

極樂に等しい自由自在の御傍で二年越の榮華を覺えました今日、どう氣心が變りましたか、それも娘に直接、逢ひました上、もし元の山家へ歸るのが嫌といへば、あらためて御相も願ひたい義が御坐いました、へい」

は、ア、塚本剛右衛門これは始めて、意ッた、不思議千萬な事、當家に左様な女は居らないが」

「居らない、左様な女は當家に居らないと仰しやるんですか」

「居ない、外の華族は知らず、この塚本が支配する河野家に、さる面倒な妾沙汰のある理由がない」

「おい、考へて貰ひたい、たつた一人の娘の在所だぜ、しかも二年越の月日だ、間違つて堪るか、この唐變木め、さア娘を出せ、その娘の父だ、いはゞ婿の家だ、こゝ一寸も

動かねエぞ」

其二十八

娘の居る居らぬは措いて相手は現在この河野家の當主に相違なき以上、その娘の父として坐り込んだる兼ての一物、そろく本音を吹き出せば、塚本剛右衛門また萬事一切を主家大切の四字より割り出して、たとひ一子の謙介を不義の捨物にするとも松風軒が眼前の證據人に現はるゝとも、なかゝ動かぬ頑固の老體、もしや萬一の場合には昔の腕に覺えありとの顔色いよく四角張つて膝を突き合しぬ、

「おい、いくら山家の爐邊に燻つて居てもね、わざく秩父の日原から芝居見物に來た理由ぢやアないから、さう古風に變な眼を剥き出して切口上の權柄づくに威張り返つても無効だ、現在この父が産んだ一人娘を當家の主人に取られたまふま、馬鹿な面で二年越の

辛抱した今日、あらためて暇を貰ひに来たんだ、この屋臺骨相應の挨拶した上、兎も角も本人を出して下さい、疵物になつてる事は承知だが、まさか胴首や手足が千切々に離れて居る筈はなからう、さア出せ、父だ」

「や、此奴め、當方の身分を顧みて穩和に出れば出るほど、言語道斷、けしからん事をいふ奴だ、事も事に依りけりで、よく考へて見い、どこの馬の骨か牛の骨か素性も知れぬ汝風情の小娘を當家に、しかも御前が、は、は、は、は、よしまた萬々一お末の端に召使つたところが、それを何の仔細あつて父の前に出し兼ねるぞ、は、は、は、は、汝は氣が狂つてるな、いづれへか一人の娘を失つて逆上して居るな」

「何、何だ、氣が狂つてる、狂氣といふんだな、こりやア面白い、よし、さう聞いた以上、さアこれから總身の筋骨を揉み上げて逆上してやるから覺悟しろ、たつた一人の娘を大

名華族に偷まれて、さうぞ慰まれた結句の果に狂氣待遇をうけた山家老爺だ、なるほど氣の狂つて出るのが當然だ、とさ、斯ういふところで御坐いますかね、如何でせう、どうか其邊を何とか御都合の宜いやう、また此方の身も立つて得心の出來ますやう、御家格の御大量に願はれますまいか、實ア貴老、御息の謙介様といふ方が内々そつと娘を連れ出した事まで、すつかり知つて參つたもので御坐いますから、あまり強く木で鼻を貴老お括りなすつちやア、却つて御當家の御損にもなり、第一は殿様に對して貴君の御忠義も立ちますまいかと心得ます、なアに出來た事は出來た事で、縁と思へば誰彼なしの相手が娘の婿、こゝア互の親と親と打解けてねエ、世間の風評も御當家の騒動もなく、無事に治る方便があるやうに考へます、は、は、は、は、しかし御所望とあれば禮儀作法も知らない猪猿同然の山家物、いつ何時でも場所と相手を構はず狂氣の眞似をして御覽に入れますから、は、は、は、

は、は、

其二十九

いづれか天の一方より我を待貌なる戀の宿に迎へらるゝと思ひの外、濱松の空より悪魔の嘲けるが如き謙介の一書に接して、あはれや全身の血管に毒汁を注がれし爲久伯、さらぬも時計の針に似たる元來の神經質は忽ち狂ひ出して、諺にいふ生きながらの屍を一種の怨靈に棲み荒されぬ、

「誰か来い、誰か来い、耳のある奴は居ないかッ」

奥の一室より不意に爲久伯の呼ぶ聲、呼ぶといふよりも叫ぶ聲、その叫ぶ聲いつしか喚くが如く唸るが如く、果は廊下口に飛び出して足拍子に踏み轟かす物音、裏屋家の悪太郎に似たり、

折しも近く廊下の此方を通りかゝりし家従の一人、そつと其まゝ首を縮めて逃げ出す違もなく、恐るゝ額越に見上げながら這ひ込めば、待ち受けし爲久伯、青白き瘦形の面に何とやら物凄き底光りの眼を吊上げつゝ、ぬつと立ちぬ、

「汝ア何と心得て居る、すぐ其處に居ながら何故、二度も三度も呼ばした」

「はッ、恐れ入ります、實は只今、これへ参りましたばかりで」

「身體の來る前に耳へ聞えたらう、汝は主人に呼ばれて返事する口といふものを持たないか」

「何とも申譯の御坐いません儀で、以後は心得まする」

「あやまれば許してやるぞ、時に塚本老爺は居るか、何をして居る彼奴、急用だ呼び出せ」

「は先刻、私宅の方に客來が御坐いまして、その者と同道、つい只今いづれかへ外出いたしましたやう存じまする」

「む、私宅に客があつて出たといふのか、ちよツ、仕様がな、ぢやア汝でも宜い、金を二  
三千圓こゝへ持つて来い、今すぐに入るぞ」

「や、お言葉で御坐いますが、お金子の儀は一切兼て御承知を遊ばします通り私どもの手  
では甚だ、どうも、迷惑を仕ります、しかし其うち塚本が今に歸りませうから」

「塚本の歸るを待つて居れるか馬鹿め、河野家の當主たる爲久が自分の金を出せと命するん  
だ、急用に誰彼の用捨はないぞ、今これへ直接に持て、汽車の時間があつて旅へ出るんだ、  
まさか塚本が金を懐中へ入れて歩くまいから金庫を開けい、何、鍵、鍵がなければ打毀せ、  
もし現金なくば誰か銀行へ走れ、えッ旅行先を汝が聞いてどうする、無禮もの、早く出せ、  
早く行けッ」

「は、はッ」

「ぐづぐづ何を馬鹿な、此奴めッ、おのれ主人の言葉に反くかッ」

「決して、なか／＼、さやうな儀では御坐いませんが、事實この私どもの手では」

「え、面倒だ、うるさい、そこ退け乃公が銀行へ行くから車を、車、車だッ」

其三十三

五尺の身體を心の絲の一筋に操られて平生の調子を失ひ、百年の生涯を戀の一念に驅られて  
元來の呼吸を失ひつゝ、一種の神經質は忽ち激して一種の失戀狂となりし爲久伯、加之も狂  
ふもの自己が狂へる状態を知らねば、いよく本心を亂して目色を變へながら暴れ出しぬ、  
そも／＼濱松といふ二字が爲久伯の腦裡を燒鐵に貫きし惡魔の業、遙の空を睨んで其惡魔の  
巢へ一足飛びに躍り込まむとする折しも、近く我居室の廊下を通りかゝりし足音に誰彼の用  
捨あるべき、旅費の金、ステーションへの車、それ出せ急げの言下に家従の一人、おもはず

逃げ出せば遁ぐるを追うて驅け出しながら、足を上げて玄關脇の一室に蹴込みぬ、蹴込まれて轉び込みし前には同じ家従の三人、あつと呆れて驚きながら立騒ぐ中央へ躍り入りし爲久伯、仁王立のまゝ左右を見廻す眼底に血筋を現はしぬ、

「汝達は全體、何のための人間だ、河野家の當主たる爲久の命に従はぬ奴等、もはや用はないぞ、置く事ならんぞ、今こゝで暇を出すから一時に打揃つて出い、しかし出る前に金庫の鍵を渡して行け、さア鍵は何處にある」

「は、はッ、いちく、恐れ入りますが、鍵は塚本」

「は、ア汝達は塚本老爺の家來だな、あの禿頭に召使はれてるんだな」

「や、決して、左様な儀は」

「でなくば鍵を出せ、もし鍵が無くば金庫を眼前で打毀せ、車ッ、銀行でも宜いから誰か隨

いて來い、車、なぜ車の用意しない、鍵が無いと車も出ないか、車、車ッ」

はや現在かくの體を見て、あはれ御痛はしやと涙を含みし家従の一人、その脚下に這ひ寄りながら額越こゆけば、青く艶を失へる爲久伯の面に兩の目ばかり赤く一種の光輝を添へぬ、

「只今も申し上げます通り、金庫と銀行の方は塚本不在の砌、我々の自由に叶ひ兼ねますが、もし差當つて至急の御入用と御坐いますれば、さる方へ驅け付けまして、何とか調達いたして参りますまでの間、暫時、あまり此處では恐れ入りますから暫時お居室へ」

「む、汝だけは聊か用に立つらしい、すぐ出来るか」

「はッ、一二時間の御猶豫を下さいますれば、必ず、きつと持参いたしまする、つきましては御入用、幾何ほどか伺ひまして」

「二三千圓で宜い、潜松まで行くんだ」

「は、濱松と承りましては迎も二三千圓じ、覺束ないかのやう心得ます、是非とも一萬圓は、もし一萬圓となりますれば一二時間のところを三四時間、まづ早く夕方になりませうか、無論、ついでに新橋の發車時間も確めて参りたく存じます」

「なるほど、汝は能く氣の付く奴だ、萬事を任したぞ、や、汝を連れて行かう」

「ありがたう御坐います、あらためて御禮を申し上げます、それ車、いや御前ではないが、御代として拙者が乗ります、それ車、車ッ」

「は、小氣味のよい奴だ、急げ〜」

其三十一

あはれ今は腦中たゞ濱松の外なき爲久伯、目色を變へて玄關まで暴れ出せし狂態を、家従の一人が當坐の方便に送り込まれて、やう〜元の居室に立戻りし折しも、いづこよりか歸り

來りし塚本剛右衛門、かくと聞くや否、おもはず兩眼に老の涙もろとも身を縮めて入りぬ、

「やア塚本、どこに居った、待ち兼ねたぞ、急用で濱松まで行くから旅費を出せ、すぐ出せ、今こゝへ出せ」

「は、しかし濱松へ、いかやうの御用が御坐いまして、もし代理の者を遣はして済みますれば」

「馬鹿な事いへ、代理の者で済む用に、わざ〜汝を待ち兼ねて乃公が出かけるか」

「恐れ入ります、では御前、ぢき〜、是非とも」

「さうだ、他の者では、いけない」

「なるほど、や、心得まして御坐います、只今、すぐ御入用だけの金子を差上げませう、と

「ここで伺ひますが、その濱松へ御出かけ遊ばす御用が、もし先方より参ッて、思召通り萬事お手許で整ひました節は」

「む、先方から来れば、わざと乃公が出かけるにも及ばないな、しかし来る筈はないぞ、どう呼び寄せても来ない奴等と見たから」

「は、ア、それは不埒千萬な奴等、御前お呼び寄せになつても来ないとは言語道断けしからん奴等、時に奴等と申せば一人のやうにも聞えませんが、全體、幾人ほどの奴等で御坐います」

「二人だ、男女二人の奴等だ」

「はて男女二人、ますく解し兼ねますが、それは何といふ名前の男女で御坐います、名さへ承りますれば剛右衛門、必ず、いかやうな仔細あるとも、キツと御前へ召連れませ

う」

「その男は謙介といふ奴で、その女は雪といふものだ、此奴等、二人、この乃公の目を忍んで出奔したから、ひッ捕へて」

「ひッ捕へた上で如何、遊ばします、また恐れながら二人のうち、男女いづれの方に最も、わけて、お憎しみが懸ッて居ります、どちらが深く御意に反いて居りませうか、念のため其邊の思召も伺ひました後」

「二人とも許せない奴等だが、罪の重い謙介といふ奴の方は、もはや見るも嫌だ」

「はッ、はッ、何とも申し上げやうのない次第、つまり雪なるものだけは、その罪を許してやらうとの御意で」

「まづ、さうだ、大體は雪に何の罪も無いんだ、それを謙介め、欺して無理に連れ出した奴



だからな」

「や、よく分りましたして御坐います、さやうな不届な奴は、元來、お對手として御身分柄、却つて恐れ入りますから、お言葉に従ひ其、その雪と申す女だけ召連れて御謝罪を致させませう、つきましては誰彼より剛右衛門が明朝、すぐさま濱松まで、しかし當節は東海道線路が普請最中、通して汽車の便もないといふ風聞で御坐いますから往返、凡そ十日あまり」

「何、汽車が不通になつてるか、残念だな、仕方がない、十日かゝつても宜いから、きつと雪を連れて歸るか」

「は、必ず、召連れて歸りますが、その間、御前、いかゞ遊ばします」

「雪さへ連れて戻れば、おとなしく乃公は待つて居るぞ」

「は、ところで雪の顔貌、よく、お見覺え御坐いませうか」

「今は忘れて居るが、見れば思ひ出すから、決して間違ひはない」

「なるほど、年齢は幾何になりませうか」

「は、馬鹿な、それが乃公に知れるか、本人を連れて來て本人に聞けば直接分るぢやアないか、や、汝、何を泣いて居る」

「老人になりますと、自然、目に、涙では御坐いません」

「は、年を取ると、たわいのないもんだな、身體を大切にせんと不可ぞ」

其三十二

遠くて近き男女の常が、まして人しれぬ旅の空に燈火を隔てしばかりの幾夜、寐覺勝の淋しさと徒然の寸隙を怖ろしき戀の曲物に覘はれて、男より誘ひしにもあらず女より誘ひしにも

あらず、いつしか道ならぬ道芝の露に踏み迷ひし草枕の濱松を脱け出でつゝ、互の身の末は  
何處に流るゝやら、浮世を餘所に鴨川の邊り寝たる姿の東山を見ながら、そつと木屋町の奥  
深きところに夢うつゝの手枕を忍ばせぬ、

謙介そもく、自己が身を顧みれば、一朝一夕の恩にあらずして祖先傳來の祿を食みしのみか、  
加之も現在の父は今なほ昔氣質の古風を其まゝに守りて、現在の當主は自己と同年同氣の同  
胞に等しき寵遇を荷ひながら、いかに人間外の魔力に其の本心を奪られしとはいへ、もし叶  
はずば死を以て防ぐべき筈の身に覺悟の前の義理人情を踏み破つて、かくまで淺ましき墮落  
の果に生涯を捨てむとは、

されど雪女は天の成せる自然の容色に萬人惱殺の美を備へて、元來の皮肉を包める一念は殆  
ど事實にあるまじきほどの大膽に生れし怪物、わけて十四の秋まで秩父の山中に閉ぢられて  
人にも交らず、やうく浮世の人里を知りしも餘所ながらの二年越、されば戀も情も深けれ  
ど只その時の春の花、また罪も業もあれど草の葉末を轉がる秋の露、いづこを生命の宿と定  
めなき心のまゝの風に吹かれて、昨日の爲久伯よりは今日の謙介を慕はしく、今の謙介より  
は他日また誰が袖に靡くやら、

この鏡花水月に等しき瞬間變轉の色に迷うて、その惡魔に操らるゝが如き怖ろしの振舞を幾  
度か知りながら、加之も君父を捨て、可憐ら自己の生涯まで魔界の戀の犠牲に供へつゝ、今  
ぞ西の都の肱枕に浮萍の快樂を貪る謙介は、もはや東の都に腕を組んで苦心の一策を講ぜし  
謙介にあらず、たゞ懷中に五百圓の金を捻ぢ込んで眼前に天生無類の美を抱きつゝ、百鍊の  
刃も鈍る鴨川の水音を聴き琢磨の心も消ゆる東山の翠色に對うて、五體の骨節は綿の如く一  
片の頭腦は溶けて油の如し、

わけて土地からの風情、ふけ行く春の夜の水を渡りて燈火の下に通ふ三味の音は餘所の色香も自己が身に添ふ心地、ほのくくと曉けゆく空の我枕を隙間もる隣屋の香粉に襲はるゝ時は一入さらに情の浮身となりて世の中を忘れ果てぬ、

其三十三

山水の明媚と美人の窈窕を唄はるゝ日本一の名所なれど、その山水の明媚は流石に世間の耳目を憚る身とて、わざと人しれぬ木屋町の奥深き一室に閉ぢ籠りつゝ、やうく障子越より鴨川と東山を偷み見る心地しながらも、美人の窈窕は此名所にもあるまじき天真の美を朝夕の膝枕、本来の魂魄いつしか飛んで五體の脱殻は悪魔の宿となり了りぬ、されど謙介の五體、まだ皮肉の何處やらに人間らしき昨日の記念を残して、をりくゝ自己が心に責めらるゝ風情、抛ぐるが如く柱に身を持たせ腕を組んで、ほつと思はず差俯く時もあ

れど、鐵さへ溶けて流れて音なく這ひ寄るほどの美に對うては、人間凡夫の謙介また忽ち骨も身もなし、

「早いもんだ、東京を出てから今日で、もう半月の餘にもなるが、や、考へて見ると濱松が、あの濱松こそ此身の立つか立たないかの境目で、生涯に二度とない善惡の巷だつたよ、を、それを、つい、うっかり踏み迷つて、あゝ濟まないこつた、かういふ罪の深い奴になつて仕舞つたわい」

「あれ、まア、どう致しませう、お氣の毒さま、妾、この妾さへ最後まで貴君に欺されきれば、宜う御坐いましたに」

「さう、いはれると猶更ら身が縮んで、どこの隅にも居れないが、全然、いかにも其通りだ、實は一時の情を忍んで東京を連れ出した最初の心算に欺しぬいた上、あの濱松へ置き去り

にして遁け出せば結局、雙方のためになつたかも知れない」

「そんな事を貴君、今こゝで」

「言つても返らないさ、返らない愚痴といふ事は萬々承知してるが、儲、寢覺の悪い事をしたよ、つまり父祖傳來の御恩を蒙つた其の、その當主も當主、わけて御心を許された主人の戀を横取した結果で、加之も偷む手段に一人の物堅い忠義一途の老父まで手品の種に使つた形跡だからね、もはや生涯、東を向いて歸れないのみか、實は満足に首をあけて世間の人にも交れない身體だ、逆も白日青天の下に立って歩けない身だ、しかし、只こゝに一事、自分勝手な料簡ながら、もし申譯の端にもなるかと思つてるのは、現在の御前に對してこそ一言のない始末で、殆ど人外に等しい所爲だが、行末の無事を祈る河野家のために我一身を不忠不義の捨物にして禍災の的を射落したも同然だ、も一事、横著な料簡でい

へば、かうなるべき道でない筈の二人が竟に斯うなつたといふ、これが人力の外で、つまり互の縁だらうよ、あゝ戀の間は兎も角、どうでもなるが、いよく縁と定まつた上は仕方がない、いはゆる出來て仕舞つた惡縁だ」

「惡縁か何か、そんな事は妾、少しも存じません、また此ごろは東京の事を皆、忘れて仕舞つて、ほゞムムム」

「なるほど、罪も自然に軽い筈だ」

「どんな罪が妾に、御坐いますの」

「や、あると思つては出來まい、その氣で居ればこそだ、しかし大なる罪惡と知つて犯した奴が現在こゝに居るから、二人前を背負つて猶更ら重い理由だ、苦しい筈だ」

其三十四

人間萬事、うき世といふ日夜不斷の敵に攻められざるものは、居常平穩、おのづから簡易單調にして一事一物に驚き易く熱し易く、もし專念の集注力を過れば忽ち一身頭腦の破滅、無智の小兒が激流の岸を望んで驀地に驅け出すが如し、

およそ世の中の浪風を知らぬ華族中、わけて昔のまゝの古風を保てる河野家の一粒種に生れ、その當主となりて今年やうく二十四の血の氣いまだ定まらざるのみか、良家深窓の處女に等しく育ちて、門外一步の世俗に用なく、また人情陰險の鈍鋒に襲はれし事はなく、加之も元來の神經質に一種の沈鬱性を交へて、風にも堪へぬ蒲柳の身が、たまく山靈水伯の神祕中より我た一人に得たる掌中の珠玉を奪はれては、逆も其まゝの無事に濟むべき筈なし、

まして奪ひしものは門を破り垣を越えて人しれず忍び入りし深夜の賊にあらず、正しく我家

に祖先傳來の恩を荷ひ來りし家宰嫡々の一子、現在の我身には心の底まで打明けて平生の力草と頼める奴、もし叶はずば家門の富貴を捨て、も何處の里へか手を携へ行くべき程に思ひし奴、その飼犬の謙介に脛を噛み倒されて面上、蹂躪られし爲久伯さらぬも、半は既に失戀狂となりし腦蓋骨の眞ッ只中を無殘なる不意の大鐵槌に打碎かれたるが如し、

濱松、濱松、たゞ濱松と叫ぶ聲、いよく高く無念の腸より絞り出して、青白く瘦せたる面に悲憤の眼の血を注ぎながら日夜に暴れ出す體、もはや人間の常態を根柢より破却せられて、あはれむべし生涯不治の狂人となり畢んぬ、

かねての心算、かくなるべき筈ならねど、奈何せむ眼前の事實、かくなりし上は、いづこの誰に對うて今更ら何をか訴ふべき、愚直にも天然の角を矯めて牛を殺せし我、不幸にも獅子身中の蟲を一子に持ちし我、この不忠不義の臍腹を搔ッ切ッて地獄の底へ落ち行くべき外に

申譯なしと、どこまでも昔氣質の一徹に取詰めたる塚本剛右衛門、本年こゝに六十三、せめては先君より賜はりし名物の短刀を罪科の白刃と押戴き、幽に漏るゝ爲久伯の叫び聲を死刑の申し渡しと聞き濟しながら、ありがたく謹んで三拜九拜の後、年は老いても時世は變れど流石に武門の古風を棄さず、靜に坐を構へて血汐の屍となりぬ、

其三十五

祖先傳來の祿に食んで恩を荷ひ來りし當主の君が、我ために悲憤と怨恨の失戀狂となりて、再び人間の常態に立返らざるのみか、河野家の血脈こゝに絶えなむとするを知るや知らずや、また昔氣質の古風一徹を守りて石の如く鐵の如く、あはれ六十三の禿頭に今日までの忠功を遂け來りし一人の父が、我ために申譯、萬分一の鞆腹かき切つて不忠不義の銘を打たれしまゝ、此世を去りしと知るや知らずや、ほつと夢うつゝの謙介は西の都に東山の曙、ふけゆく夜の枕頭に鴨川の水音を聴きながら、淺ましや其君を狂人とし其父を殺せし惡魔の變化を天女の眠れる如く思ひぬ、

硯ひ外さぬ浮世の金的とせし河野家の當主が俄に不治の狂人となつて、加之も二の矢的的に射抜かむとせし塚本剛右衛門が不意の鞆腹を切つて、娘は奪はれたるまゝ奪ひし敵手もろとも雲霞、行方も知れぬ腹立まぎれに武者振り付いて、今は只この古坊主一人と掴みかゝれど、此奴また慾怱の鼻毛を引抜かれて取付く鳥もなければ、逆捻ぢに本音を吹いて二年越の養育料を返せと喚きつゝ、珠玉を抱き合ひし小人の罪のみ残つて互の喧嘩に惡木の花ばかり咲き出しながら、偕これといふ實一個もなし、

謙介の懐中に五百圓の金、そつと膝の上に載せて靜に打守れば一枚の數も減らねど、いはゞ人目を忍ぶ戀の宿に夜も日も分かね男女の快樂、いつまで其まゝにあるべき、濱松より京都に入りて二月あまりの夢さめし後は、知らぬ他國の空に翼なき旅鳥、君父の應報また五體の手足は曲らねど、はや浮世の冷たき人情に捻ぢ伏せられ、加之も美人賣買の市に等しき名所にさへ無類の天生またあるまじきほどの美を其道の曲物に附け狙はれつゝ、果は落ちて動けぬ油斷の寸隙より何奴にか奪ひ去られぬ、  
 その家の恩に育ちて其君の手より奪ひ去る謙介に伴ひし後は、いかな旅路の寢覺勝にも、絶えて再び東の空は思はざりし雪女、今また謙介より他の手に奪ひ去らるゝ時も、一點さらになし、情の涙なく、たゞ散る花の風に従ふ如く行く水の淵瀬に變るが如くいつの間にもやら去つて痕なし、

さても謙介より奪ひし奴、また謙介と同じ落日の曉は何物に奪はるゝやら、ふしぎや美醜賢愚を見る目を選ばず、あやしや富貴貧賤を心の慾に數へず、誘へば誘はるゝ西東、をりへの戀に其身を宿して北南、いかなる神の惡戯に作られて斯る怪物の生れ出でしか、

そもく色餓鬼の亡者を濟度せむために出で來りし馬郎婦の權化か、そもく人間の弱點を捉へて教ふるために出で來りし大乘佛の俗解か、但しは浮世の間道を横行せむために出で來りし惡魔の變化か、縁の有無も情の生滅も心の冷熱も氣の變轉も皆これ自他の別なき自然の業、あはれ此後また幾何の男を踏み渡りて浮世いかなる身の末に運命の水性を流すやら、雪女こゝに十六、天真の美いよく、冴えて前途の春まだ長く深し、

魔詞波旬の大悪魔、鐵杖を提げ輪寶を捧げながら、ちらと雲間に本態を顯はせしが、たゞ一輪の薔薇の花を地に吐き落せしよ、忽然また雲に隠れて何處にか消え失せぬ、

浮世草紙

人間棺を蔽うて論定まるとはいへ、人に老少不常の死あり、事に利害得失の數あり、世に榮枯盛衰の理あり、時に禍福吉凶の機あり、物に窮達消長の差別ありて、浮世の萬事は唯うたかたの水の流れに等しく、同じ夜道に物拾ふ人と物を落す人あるが如く、天にありとかや運といふ奴、おもひの外に世間を騒がして、強ち墓碑が生涯の善惡邪正を分ち成敗賢愚を見るべき確固の證據ならざるのみか、浮世を去りし屍を打てばとて貸した金の戻りし凡例なく、犯せし罪の報いの怖ろしさも知らず、またその骨を拾ひ集めて金銀珠玉に繫げばとて、宮殿樓閣に祀ればとて、死人ふたゝび肉づきし凡例もなく亡者ふたゝび踊りいでて拊舞雀躍せし事も聞かず、本尊すでに背門の霜と消えて表門より叫ぶ毀譽褒貶は皆これ生き残りしものゝ



業、されば死後の名譽は生前一杯の酒に如かずといひし洒落者もありしが、この駄洒落も亦どこやらに臆病未練の負け惜しみ、そもく天と地が轉び寢の戲事に萬物を生じてより、無常の岩木にさへ生滅の理はある常慣、ましてや後れ先だつ人の身は絶え間なき次第おくりの電光石火、草の葉末を轉がる露の生命に夢うつ、何の仔細かあるべき、乞食しても死ぬまでは生き伸びる筈に出来上りし世上の風をうけて、たゞふらりと下りし絲瓜の皮、これを長しといふもよし短かしといふもよし、さては無用といふもよし有用といふもよし、道理は其日其日の我まゝ勝手に氣の持ちやう心の動きやう、たゞ笑うて生血の凍るまで、押せや押せく末は釋迦も孔子も同じ墳土の骨なるぞと、古今の聖賢が頭痛鉢巻に猶かつ解しかねたる此むづかしの世の中を三分五厘と見て、吹けば飛ぶべき自己が身を赤裸百貫と心得し闇雲の男ありける、

論外滅法、かゝる無分別の男しばく世にいでて、おのれ一人の白痴で終れば濟むべきに、闇の夜の鐵砲玉に等しく賢山伏の法螺の貝に等しく、しきりに打ち出し吹き立て、世上を騒がし迷はせしかば、うまれし五體は満足なれど血道の狂ひし不具もの乃至また及びなき青雲の梯を踏み外して溝板の上に轉け落ちたる腰抜ども、忽ち附和雷同して以來こゝに人心みだれ道義すたれて、あはや人界の六分は虎狼野心の棲息ならむとせし時、もろくの智者賢人うち集ひつゝ世のために策を設けていふ、およそ人間の定命とて古來七十は稀に百歳たえて殆ど無しとの相場あるが故に、市井の凡俗おろかにも心急いで働かうとはせず却つて短かき浮世に自由ならぬ自棄腹を起して、生涯の善惡ともに一人一度の往いて還らぬ死といふものを差引なしの總勘定と心得、かくも本心めちやくくに崩れかゝりし鬪暴狼藉を救はむとせば、なかく一朝一夕の道理學理をもて其甲斐あるべからず、さればまづ人の生涯を幾段

にも切り刻んで一人一度と限りし總勘定を度々の小勘定として、さらに用捨なく年々の差引きびしう稼いで徳を餘すものには安樂させ怠けて罪を借し越すものには苦勞させ、其日々々の油斷大敵をもて隙間もなく攻め立つるより外はなし、よしや今年は怠けて借金の淵に沈むとも自から悔いて遊び出せば一夜あけてのまたの年末には忽ち安樂の報酬、よしや今年は人並すぐれて安樂に誇るとも怠ればまた忽ち手放しの車阪、ころ／＼と轉んで元の籠に泣くを怖れず驚いて猶かつ横著無道の奴には世間の懲戒として、定命の總勘定も待たせず其場に首吊腹切氷死毒死の埒をまけて冥途に追ひ遣るべしと、いよく／＼こゝに評議一決、一年三百六十五日の最終を極月師走の大晦日と名づけつゝ、定めなき世の定事として生あるうちは逆も遁れぬ假の生死いくたびか、またしばしの猶豫もなく平生の勞逸勤怠を報うて襲ひ來れば、二度とは死なぬ生涯一度の死を的に闇雲ばツかり飛び跳ねたる無法者も、さすがに閉口

頓首この峠一重に遮られて、南無三寶の荒神棚より猫に蹴落されし鼠の如くチューの音も得立てず、まづはこれにて天下泰平の一助けとぞなりぬ、

されど人は自己が身勝手の勇氣なく／＼熾盛にして、最初は腸の九廻すべき恐怖も驚愕も後には次第に薄らぎ竟に忘れて慣るれば樵夫よく百尺の空に睡り坑夫よく千仞の底に唄ふが如く、さつと吹き來る浮世の嵐もろとも年々生死の境に狼狽へ騒ぎし大晦日も、いつしか度かさなりて質草の遺線算段を覚え、義理人情を楯に取って嘘八百の箭種さん／＼敵を欺く徒輩はまだしも、機會よくば逆様に此うへ今年の損の掛け終めをして差當る峠を越えむと企て、もし叶はずば尻ひツからけて人を踏み仆した其足このまゝの駈落逐電、いつこの里にも太陽と米の飯はある筈など、心得、果は手足もがれて首は引抜かれた凡例もない借金に遁け出して、多年の間を宿しまるらす貧乏神の手前はづかしと、横著無類の胴骨いよく／＼こゝに据れば、逆さ

に吊して振つたとて鼻血も出ぬ男一疋さア打つなりと踏むなりと御心次第に身を抛け出し、  
 無くば無いで通る地獄の上の轉び寐に四面楚歌の聲を聴て鼻唄まじりの大の字となり、萬に  
 一つの相手の文句が氣に入らさば飛び揚つて横面張り曲めむとする大膽者、死にもせぬ伯父  
 の香奠かきあつめて一時の腹を肥さむとする奴より先祖代々の石塔を庭の踏石に賣り飛ばし  
 て一杯の酒に代へむとする不孝者まで、それくくの分相應に借りたもの返さぬ工夫を手柄に、  
 なほ論外滅法の殘黨あつて折角の大晦日またもや元の淵瀬に流れ込まむとすれど、儲それ等  
 は世上を見渡して僅に十の二三、佐渡の名物その身に餘るとても義理人情に一文半通を使ふ  
 奴原ならねば、世に法律と監獄署のあるかぎりは何と詮方もない人中の糞土、たゞ度し難き  
 不靈の難物として其餘の目鼻あるもの凡そ此日を以何に送るべき、よしや富貴に生れて金錢  
 の出入を知らずとも、門外に走せ違ふ修羅の巷を壁一重に隔て、闇の夜の提灯を人魂の飛ぶ

かと疑ふ刹那の無常には、すぎし一年の善惡邪正を省みて我から心の鬼に責めらるゝもの多  
 かるべし、

金錢は賤しきものなれど、かなしや人間七分の喜怒哀樂は此いやしきものに繋がれて、生涯  
 一度の死を幾度か繰り返されつゝ、深山の奥にも味噌醬油の通ふところ、荒磯の濱邊にも雞  
 犬の聲するところ、忽ち三百六十五日の末の一日に節はれて、掛乞の鬼に攻められさば心の  
 鬼に責めらるゝ一年の差引勘定、天を翔り地を潛る仙人も此日一日だけは通を失うて尋常の  
 凡人に返るとかや、かほど怖ろしの世の中に、そもや何者の氣まぐれ奴ぞ、生血をも買へば  
 買ふべき極月下旬の金錢を惜しけもなう振り撒いて自己が營業でもない長文の廣告を都下あ  
 らゆる新聞雜誌に掲げいだしぬ、しかも其文の奇にして心の調子の飛び放れたる鹽梅、さては  
 同じ半死半生の間に苦しまぎれの狂氣沙汰かと思へども、住所姓名たしかに記して怯めず臆

せず何處やらに世上を冷かす面憎さ、雪霜を破ッて咲く花の梅に及ばずとも水仙には似たりける、

◎愚痴、こぼしどころ 大晦日按腹療治廣告

あはれこゝに一年三百六十餘日の總仕舞、ことしの煤と共に萬事を打ち出して大晦日の木戸際となり、また來む春の狂言さまぐに新ならむとするの人情、よしや忘年会の二日酔を持越し給ふとも、その他の世事一切すべて卵の毛の末も残し給ふべからず、されどまた浮世の常慣とて軒端の賃餅を春き始めてより人の嘘をつくこと此月に甚しく、屋根の下に居ながら門外に立つ乞食の境涯を羨む切なさも此月なれば、およそ世間あらゆる喜怒哀樂も多くは皮一枚の張拔提灯、たゝ

んで仕舞へば蠟燭の心底しゆつと消えて一握みの本心、さらく然うでなかつた、あれは全く其場の行掛りで實は心にもない一時の遁辭窮策といふ、その御苦勞の魂膽そのまゝ持越しては徒らに野暮の腹ふくれして、第一が年と共に新ならむ御主意に反く不吉の基、第二には正月の雜煮餅を眼前に控へて衛生上の大害ともなれば、こゝに愚痴こぼしどころ大晦日の按腹療治を開業して四方の諸君が眞實の胸のうち、取も直さず今歳一年の世を渡つた使ひ殻、即ち來年不用の古腸を悉く申し受けて、御所望とならば失禮ながら御相談の片腕にもならむとす、固より秘密の上に秘密を守りて戀人の御坐をさまし借金取に内通するなどは神もッて、拙者方の壁の耳も削り臺所に窺ふ徳利の口をも堅く塞ぎおけば、近縣旅行もしくは虛病作事の御寸暇をもて、お心おきなう御來臨のほどを乞ふ、

ちと遠路なれど冬の枯野を御見物かたく一時の人目を忍ぶには最風竟  
のところにて隅田川邊の綾瀬の里

蛙面馬耳郎 敬白

春は隙間なき花屏風、夏は葉越の水を吹き来る風、秋は固より月の名所、冬は一望の銀世界  
さらに餘所の景色を許さねど、その雪いまだ降らねば見渡すかぎり霜枯れし師走の二十八  
日、はや大晦日は神田京橋あたりに押し寄せて修羅の巷の眞最中ながら、さすがを向島とて  
風流の鈴うったる此邊のみは、浮世の外の心地して筏を流す篙師の小唄も迫らず、春まつ草  
の空屋に睡る犬さへ毛並しづかなる一筋土堤を、いづこより迷ひ來にけむ、年のころは盧生  
の夢の半を過ぎて去歳は二十四の千紫萬紅を蹂躪つたといふだけ白痴の今年は二十五の曉

より落ち果て、たしかに半歳は住むべき家なく頼るべき人もなくて路頭に立ちし面相骨格、  
昔ならば紙子の袖さつても手觸りが荒いくと洒落れたきところなれど、なさけなや垢染み  
で縞もおほろの古衾、色さめはてし眞岡木綿の羽織に裾から襪襦が下り藤の紋つけて、最初  
は白かりし兵兒帯それも破れし唐縮緬のいと悲しく、なくば却つて目立たぬものを黒の山  
高帽子ところく龜裂われて地圖の如き斑文を現はし、徒跣で歩むか冷飯草履が分相應なる  
に、まだ此身の末に飾りたいとは淺ましい大道夜店の疊附下駄を、爪頭の食み出でし紺足袋  
に引摺り引掛けて四邊きよろく、白銅の一個も枯草の間に落ちてないかの眼配は、あはれ  
宛から煤掃と共に叩き出されし貧乏神に似たりける、  
三圍の稻荷、牛の御前、白髯の森、いちく右の方のみ見るは首骨の曲つた不具かと思ひの  
外、なるほど左を向けば河面の寒風に吹かるゝ恐れ、やがて頭をあけて見上ぐる前途に鐘が

淵の紡績會社、冬空の雲を凌ぐ煙筒より絶え間なく吹き出す煤煙が金になるならばと、無慾に似たる大慾の瘦腹とほく梅若も過ぎ隅田村も打越えて、こゝぞ緩瀬ときくや否や懐中より新聞一枚取出して例の廣告を見ながら、蛙面馬耳郎様の御宅は何處ぞと問ひぬ、總瀬の里の薄氷はる田甫中に笠を伏せたる如き岡土の孤屋、籬を見起の入道めいたる松の大木ぬつと出でて、その外は兼好が嫌ひし庭木ばかりの下に、つれづれの暇はありながら草も撈りの氣樂の獨住居、こゝと教へられたるま、枯柴の門を入らむとすれば、果して墨くろぐろの大板は愚痴こほしどころ大晦日の按腹療治とぞ記しぬ、かの貧乏神に似たる瘦男おそるく門を入りて戸口に佇みながら、三河島菜の壓石でも直らぬ羽織襦袢を両手に搔卸しつゝ、俄に古衿の衣紋つくらうて、あはれや臍の邊に響く咳拂ひ一咳、

「御免下さい、おたのみ申します」

聲き、つけて奥より立出でし此家の主人は、人間の定命うち越えて浮世を十四五年も偷みし七十ちかの老爺、禿けたる前頭は夏の蠅も迂りおつべきほどに磨きあけ、しよんほり後所に残るは冬まちわぶる眞白の雪毛に櫛の齒を入れて、今こそ梅干なれ昔は花の枝に鶯なかせた戀人の形見とも覺しくて當世めづらしき縮緬の小袖を重ね、八反織の黄勝なる被布仕立仔細らしくもなく、わざと水に入れし白足袋、殊更に勿體ぶる鬚髯を剃り落して、その他の風俗萬事どこやら尋常の娑婆塞ぎにはあらざりける、

「いや、これは何處から、はアなるほど、あの廣告文で、それはく、さアまづ此方へ」言葉の案内につれて一室に打通れば、まばゆき金張は嫌とてや、いぶしかけたる無地銀の二枚折、隅立て、竹柱の半床に何やらむ古びたる細字の一軸さても心憎し、郡内縞の坐蒲團

桐洞の丸火鉢、釣瓶形の煙草盆、さしいだす薩摩焼の大茶碗は玉露少々底にと思ひの外、たゞの番茶なみくと飽くまで炮じあげたる香ばしさ、麥落雁とは捻つたる添菓子、なるほど七轉八轉の年の暮この境涯ならでは彼廣告文を出されまじと、瘦男まづ茶を飲まぬ前に自己が氣を吞まれて今更ら居坐を直せば、主人の老爺からくと笑ひながら、

「さアどうか御遠慮なく、あぐらでも搔いて下さい、年を並べりやア恰ど親子の年輩、そこでもまづ小言をいはない親父と思つて萬事の打明け談話が聞きたいね、私も今年は最早六十五で、人間の埒をあけても更に不足のない白髪をいたゞきながら、御承知の通り、あんな氣樂な廣告を出した鹽梅は丸で狂氣沙汰ですがね、若い時から持つたが病ひの世話好で、餘所の便所へ駆け込んで他人の尻でも拭いてやりたいが性分さ、その上に子はなし親類はなし多年連れ添つた婆は六年以前、今ぢやア野中の杉の一本立は、ムムム、輕業師の口上

めいた身分ですから、つい徒らに老後の慰事かたぐ、萬に一つ來られた人の相談相手になる事もあらうかと時に貴方は何をなさいますね、商人とも思へず官吏でもなく、藝人は猶更ら手足の骨格は職人でもなからうし、まづ矢張り書生さんと見受けますが、何を御修行ですな、失禮ながら御病氣でもないし甚しく元氣衰弱の容體といひ、いかにしても時候に外れた御召物といひ、嗚お寒いでせう、さア御遠慮なく火鉢の際へ」

いひつゝ其顔を見れば、さらぬも巢を失ひし寒鳶の瘦男、たゞしをくとして、竹細工に濡紙を張れるが如き兩手を火鉢の上に差出しながら、我を忘れて水鼻一滴しゆつと落しぬ、

「お察しの通り、私は書生、醫學生ですが、東京へ來てから今年で丸八年」

「なるほど、随分お長い間の御修行ですな、大學ですか私立學校ですか、一昔に僅二年の不足、定めて」

「ところが、お恥かしいことッて、ある私立學校出で前期を三年以前やうく取ったばかり、おもへば何事も自分が悪いからですが、かやうな落魄になつて今更ら國へも歸られず、また當地に親戚朋友などは澤山御坐いますが、いづれも人情の薄いこと紙の如しとやらで、始め學資の充分あつた頃は、いろく深切に餘計な世話まで立入つてしてくれましたが、さて今の身に落ちてからといふもなア鼻もひツかけてくれない始末、實に人間の冷熱には驚きましたな、以前は随分すんで人の扶助にもなつてやつた私ですが」

「いや、ちよいと御待ちなさい、お言葉のうちに、思へば何事も自分が悪いと仰しやつた、まづその御自分の悪いところから承りませう、人情の薄いの厚いのと裏長屋の鼻が煎餅の選擇するやうな事は貴方の身に取つて入らざる枝葉の論です、いはゞ關係のない他人の上、善惡ともに人は自己が心で飽くまで責任を持たないと、無用の喜怒哀樂に驅られて果

は首を縊るやうな事、まアさ、ありもすまいがね、はムムムとかく女々しい思慮はいくら繰返しても無効ですから」

「はい、ぢやア萬事うちあけて申し上げませうか」

「さやう、男らしう打明けて御談話なさい、及ばずながらまた愚者の一得、お力になる事もありませうから」

「外でもないです、實のところ今日かうなつた原因は、あの何です、まづ女です」

「はムムム紋切形の通り、しかし女は何者ですな、たゞの地女か藝妓か娼妓か、乃至また其他の魔性ですか」

「え、全く彼女がためです」

「さアその彼女が貴方の一人合點で、私には分りませんよ、しかし察するところ藝娼妓のう



ちですな」

「はい、最初は藝妓で今は娼妓ですが」

「いや分りました、人に問はれて名もいはず、たゞ夢中に彼女がと仰せらるゝ目付といひ唇端といひ、ちよいと肩を軽く揺つて乙な御容體、はゞゞこの寒い極月に引替へて、なかゞお熱い交情ですな、また最初は藝妓で今が女郎とは、言はずも知れた小本の雛形、貴方といふ情人があるため總ての客が落ち果てゝ其上その逢引この忍びに不義理な借金が高み、首も廻らぬ始末から、えゝいッその事、これも可愛いゝ男のためだとか何とか言つて竟に遊里へ流れ込んだのでせう、ところが今までの自由に出歩いたとは格別、小唄にうたふ籠の鳥で、互に格子一重を隔てゝ任意ならぬ憂きおもひ、乃至また大籠ならば二階の櫺子窓から見下す顔、往來の車夫に叱り飛ばされながら首を伸ばして見上ぐる顔、とでもい

ふ境涯ですかな、但し斯う見た御様子では、失禮ながら其かなしい楽しい事も昨日の夢と過ぎて、無念や今は所謂る彼女先生の氣心が變り、呼べど出て來ず招けど聞かず、千束の文の通路も絶えて貴方一人が抛け出されの中有に迷ふといふ御身分ぢやア御坐いませんかな」

きくより瘦男おもはず身を震はして膝すりよせつゝ、怨めしげに睨む眼中の凄まじさ、七年たづねあぐみし親の敵に出逢ひたるが如く、半は憤怒を帯び半は半泣きの逆上、主人が言葉打消さむとする手先はツと狼狽へて火鉢の灰に突込みながら、驚いて猶更むきいだす大目玉、あやにく光り輝かで雨夜の塗盆に似たるぞ哀れなり、

「御主人、いかにも不思議に御言葉は合ひますが、彼奴が心變りといふ一段いさゝか相違です、なるほど藝妓も娼妓も欺すが營業とはいひながら、あれに限つては萬々、かりにも其

邊の氣遣ひは、第一に彼奴を今の淵瀬に沈めたは誰です、全く私の罪で以來さんぐの苦勞艱難なほかつ其罪を怨むどころか、親兄弟でさへ怨むが常慣の遊女の身で、あかの他人の私を」

「いや、これは悪かつた、さほど深い御交情とも知らいで失禮千萬、しかし貴方、今でも何ですか、をりくお逢ひなさいますか、しばく身揚りで呼ばれるといふ境涯ですか、時にそれほど心中女が、いかに苦勞すればとて可愛い、貴方を寒中の古給一枚で置きたア情人ぐるひするほどの女にも似合はない甲斐性なし、案外に腕のない女ですな」

「ところが、そこなンです」

「どこです」

「外でも御坐いませン、今も現在本人の私が口から言ふ通り、たとひ大地を撃つ槌は外

るゝとも彼女の心は、決して變らないですが、奈何せん、仰せの籠の鳥で」

「はゝゝ他人の口から言へば兎も角、現在御本人の貴方が口から言ふだけに覺束ないですよ、最初に貴方が怨みがましよう、人情は紙より薄く今更に驚いたといふ、その驚き鹽梅を聊か利用して、ちと彼女どのゝ頭上へ振り撒いたら如何です」

「こりやア酷い、お冷かしますか」

「少々冷かしても宜いでせう、あまり度を過ぎて熱くなつちやア毒ですから、用心の上にも御用心なさいよ、孝行に賣られて不孝に成り果て實意から出て嘘に終るは古今あの里の常、それがまた強ち無理でもないさ、よし無理と言つたところが賣物買物で、體も心も先方の勝手次第、種の切れた此方が何うなるもンですか、なるほど最初は貴方に實意を盡したらうさ、なれどその實意といふものが、盡し甲斐あつてこそ盡しもするものゝ、いくら盡した

ツて無効と見極めの付いた時にやア紙の橋を渡るより危いものですね

「しかし御主人、これには段々」

「いや其しかしといふ奴が甚だ善くない奴で、得て事の間違ひを惹き起すもんですよ、第一が貴方、よく考へて御覽なさい、人の心は目に見えぬもので、また動き易いもので、現在に血を分けて生んだ我子の心さへ親の思ふ通りになりますまい、いや子の心が親の自由ならぬどころか、自分の心さへ自分の自由によりやアなりませんよ、まづ差當り貴方の事にして、國を出て志を立て、醫學修行の最初には、學もし成らすんば死すとも歸らずで、三年か四年が間に脇目も觸らず一所懸命の勉強して、天晴れ故郷へ錦と思つた其お心が、すでに彼女などといふ魔物のために過つたやアありませんか、高が女の心、まして泥水が腸に染み込んだ賤しい女の心、それが何の的になりますものか、蚯蚓の木のほり泥龜の

居合拔で、逆も及ばぬ果は言はずと知れたこと、男の意地だなどと血の狂つた料簡を振廻し、その女の胴腹を扶り損ねて警察の厄介となり新聞の雑報種になる位が關の山さ、は、は、およしなさい、藝妓や女郎の心が此方の望み通りに違はぬものなら日本中の柳巷も花街も一夜に潰れて喧ましい廢娼論の必要もなからうし、また世間に資金をかけて堅い商賣しながら損をするもなアありませんよ、は、は、は、

「しかし其點は」

「いやまた、しかしをお出しなさるよ、悪い癖だ、しかしとは多く物の道理を逆に捻る言葉で、いはゞ大道の横町新道ですから、石に躓いて轉ばぬやう溝板を踏んでおっこちないやう、よく氣をつけてね」

「へエ」

「へエぢやアない、全くのところだ、たとひ彼女が今なほ貴方に情を立て、互の身のためだ、當分は逢はぬ昔と諦めて下さい、今の苦勞は後の寐物語、來年の何月いつごろに身が自由になるから其時こそはと、太鼓のやうな血判に根元ぶつり髪を添へた證文があるにしろ、その血判が五臟六腑を絞つた血でなし、その髪の毛が頭の皮付ぢやアあるまいし、しかも約束は來年の何月いつごろでなくば分らないこと、いはゆる未必條件中の頗る茫として尤も漠たる奴さ」

「や驚いた、どゞどうして其事が分ります、年があけるまで互の身のために辛抱するといふ約束を」

「は、は、は、分るが不思議ぢやアない、分らない貴方が不思議だよ、すべてね、あの世界は此人間界と萬事別物に出來上つて居ますから、一度おツこちたら百年目、いかなる女でも必ず其別物の風習に染むものです、たゞその女の性質に依つて多少の厚薄あるばかり、まして情人ぐるひをしたり男のためだなどと騒ぐなア猶更ら別物の風習に深く染つた方で、ね、その深いといふが即ち甚だ危い次第さ、熱するものは冷め易く、喰ひ付きたいほどに思つた男ほど、却つて飽きが早く來るさうです、といふなア外でもない、そもく女が身の皮を剥いでやらざア獨立の出來ない男で、いはゞ女風情の甘くもない脛を嚙つて悦に入るほどの意氣地なし甲斐性なしだから、もし其女に氣がついて見ると、どうしてく、田市の鴉に身をつつかせても、いやな事あんな端野郎に箸片端、末の依頼になるものかと忽然とか落の目醒めがするです、ね、そら其處が糾り合せた絲の戻りめ切れめで、嗚呼つまらない何故あんな平凡くた者にと思つても、流石に人間だから物干竿で奴の目鼻も突かれまいし、また馬鹿野郎の白痴一心で呵しな眞以をされても堪らないから、こゝにいまづ淺黄

幕の必要が起つて、來年の何月とか來々年の春とか秋とかの氣やすめ文句、去るもの日々  
 に疎しの理を應用して巧に脛を喰はせるのさ、は、ム、ム、貴方は最初に彼女の脛を嚙つて  
 今ぢやア脛を食つてるのだ、前後の味ひ如何で御坐いますな、鐵砲玉が中りやア其場で生  
 死の埒はあくが、女郎が遠まはしの脛鐵砲なか／＼迷つた奴の身に當分わからないも道理  
 さ、だから今のうち男一貫お跳ねなさい、みごとに一跳こゝを跳ね切つた上、先方が脛な  
 ら此方は足の踵鐵砲といふ奴をお見舞ひ申して、どうだ阿魔どてツ腹の息が通ふか、まだ  
 自己の脚に條鐵が抜けなかつた筈だとか何とか其處は勝手次第に威張つた、曉、一場の夢  
 さめての後の奮勵一番、雨後の月影いと清きが如く三四年みツしりと御勉強なさい、ね、  
 彼奴一人が天下の女でもなしさ、分りましたか、これで分らなきやア失禮ながら貴方の脛  
 は、あがつて仕舞つたも同然だ、いかゞです、御返事は」

「どうも實に」

「その言下へ汗顔の至極と出ませんかな、ぢやア先づ萬事さしおいて、彼奴が心の眞偽は來  
 年の何月にならずば分らないから、せめて、それまでの間でも翻然として御勉強なさい、  
 損の行かない事だ、ね、石を丸煮にした堅い目的でも、その目的の來るまで茫然ぢやア無  
 効です、まして蓮の折目の絲にも足らない女郎の、いや、もう止ませう」

いひつゝ主人の翁は起つて幾何か白紙に包みしまゝ、瘦男の前に差出して、いさゝかなながら  
 歳暮の印、一夜あけての初春また御意を得むと會釋すれば、血筋の親の千言萬語より他人の  
 女の一句に極月寒中古拾一枚とまで成り果てし奴、そを突き戻すほどの勇氣さら／＼我慢も  
 なくて、飢ゑたる猿の如く、おしいたゞいて懷中に捻ぢ込みつゝ、しを／＼と力なけに影さ  
 へ薄く出で行く哀れに引替へて、破鐘の如き勵聲一番たのむと叫んで入り來りしは、年輩二

十四五の大男、罽纈帽子を阿彌陀に被ぎ、羽織も布子も黒木綿の五所紋に鳴海しほりの大兵  
兒帶、右手 薪雜棒かと疑ふステツキを携へ左手に身分不相應なるマニラの葉巻、香氣粉々  
ばツと煙を吹き上げて朦朧たる中より大の眼光くわつと光らせ、小山を欺く兩肩の怖ろし  
さ、あはや後邊に乘反り返らむかと思ふばかり胸板を突き出して、時候の挨拶たゞ一事さへ  
宛から百萬の敵に臨んで怒るが如く吼ゆるが如く、口角に泡を飛ばして叱咤の風情いはゆる  
世の壯士なるものなるべし、そもや何を食うて斯くまで肥え太りけむ、人竝すぐれし五體い  
よく目立つのみか、うまれつきの醜男ますく晴れがましう、土樋頭の五分刈に火事場の  
握飯めいたる鼻を面の中央ならで、なさなけや少々横町に振り向いたるは親御が闇まぎれに  
仕損ひの御作佛、鹽口より馬の齒を現はして眼中いつも事あれかすと風上を覘ふ勢ひ、狼狽  
へて今の瘦男を踏み潰さざりしは互の身の僥倖なりける、

「たのむ、たのもウ」

「はい、これは」

「む、蛙面馬耳郎ちウ妙な名は君かな」

「さやうで御坐います」

「ぢやア例の廣告を見て来たもんだが」

「それは能くこそ、さア御遠慮なう」

「失敬」

「え、始めて御目にかゝります、時に貴方ア何處から、別に御姓名を伺ふほどの必要も御坐  
いませんが、念のため、御差問なくば御職掌と共に」

「僕か、僕ア何です、兼て聞き及ばれたらうが、日本決死倶楽部といふ青年團體の一人で、

不肖ながら數百人の幹事をして居る富田兵吉といふものさ」

「いやこれは、知らぬことゝて失禮千萬、ぢやア度々新聞で伺つて居ります、あの過日も何黨とやらの何とやらいふ代議士を、ぶちのめした方ですな」

「むゝそれだ、國を賣り黨を賣り虚名を賣つて猶かつ足らず他人の屋敷の地面まで應對なしに賣り飛ばして平然たる不義の奸物ぢやから、社會公衆のため僕が一人すゝんで鐵拳を加へてやツたのさ、はゝゝゝ實に愉快ぢやツたよ、しかも青天白日の下で往來の中央、車上から引摺り下して凡そ三十分ほど遣ツ付けたが、恩顧の車夫め一番に遁け失せて黒山の如き騷擾に、警官の一人も來なかつたな實に奇だツたよ、なアに來ない筈もなかつたらうが、僕の面ア一目みたら仕方なしよ、はゝゝゝ月界仙境の快また之に如かずさ、すべて物の衝突が議論で、議論の結果が腕力ぢやからな、かつまた巧みに法網を潜つて徳義上の制裁を屁とも思はない奴は、天下の志士仁人これを捕へて遣ツ付けるのさ、はゝゝはゝ」

「なるほど、なか／＼御壯な事ですな、いはゆる日本決死俱樂部といふ文字中、決死とは死することゝで萬人いづれも恐れて嫌がる死なのに、その死を以て俱に樂しとする豪傑の寄合だから、そこで其名が出來たんですね」

「さうだ／＼、君は随分わかツた人間だ」

「ところで貴方が御姓名の富田兵吉とは、とんだ飄輕者といふ意味でなく、身を以て天下の難に供し志士仁人を以て任ずるがため、日夜に御ふりまはしの腕力が即ち兵の一部で、兵こゝに強ければ國も從ふて富むといふ意味からでせう」

「おもしろい、君は話せるわい、語中おのづから洒落を含んで頗る妙だ」

「いや決して洒落ぢやア御坐いません、眞面目で御話し申すんです、時に今年も餘日なく、はや二日三日に差迫りましたが、萬事が世間の凡俗と違つて在らツしやるから大晦日などの御心配は更に御坐いますまいな」

「まア無いと言つて然るべしだね、よし借金が山ほどあつても悠々また寛々、面前の微風一陣にも價せないさ、何ぐづぐづいやア構ふものか、忽ち遣ツ付けるから先方も取りに來ないよ、はゝゝゝ」

「それは全くでせうな、かたい千圓の抵當物で五百圓の高利さへ覺束ない世の中、まして、失禮ながら貴君がたに金らしい金を貸す馬鹿はあるまいし、よし貸したところが始めから呉れたも同然、まさか僅少の金錢で生命を失ツちやア堪りませんからね」

「おや、主人、何だか變な物言をするな」

「おや、何だか變に聞えましたかな」

「僕等に金らしい金を貸す馬鹿は、まづ世の中に無いと言つたやうな事を」

「やうぢやアない、しかと左様に申しました」

「どうして其事が分る、もし貸手があつたら主人、なんと答へる心算だ」

「もし貸手があつたら即ち案外の馬鹿と答へます、貸す馬鹿のなんといふは、取も直さず貸す奴の馬鹿と申す反證で、今こゝに坐するもの二人、貴方が私より若いと言へば私は貴方より老人、もし私の方が老人といへば貴方は私より若いといふに同じ事で」

「こりやア主人、僕を嘲弄するんだな」

「貴方また斯な梅干老爺に嘲弄される方ですか、いやしくも天下の志士仁人として」

「だまれ老爺、貴様ア僕を尋常の人間と思つてるな」



「どう致しまして、尋常の人間たア思ひません、尋常の人間は貴方のやうな亂暴でないか  
ら」

「ふざけるな畜生、これが初対面の老人と思へばこそ、相手に足らぬと思へばこそ」

「もし老人でなく相手に足らば何となさいます」

「は、は、知れたこつた、貴様の生命は風前の燈火、僕が手ぢやア鷲の一握みだ」

「では雀の類といふ意味ですか」

「雀に及ぶものか、蟲だア」

「蟲、蟲たア御言葉おそれ入る、しかしこの蟲も今こそ世につれて斯うなッて居ますが、も  
とは父祖代々音に聞えた劍客武道の家に生れて當流の外に諸家諸流の允可も許された蟲  
で、御維新の初陣以來いさゝか覺悟の腕を無事に苦しむこと殆ど小三十年、

をりく寝覺勝の枕を欬て、白刃の強盜でも來よかし、一捻ッ捻つて久方ぶりの慰み半分  
にと、實は望むところの業です、伏見鳥羽の戦争から上野をかけて會津の籠城までに鐵砲  
疵が二つ太刀疵が六個所、すでに無い筈の生命を今日まで生き伸びたからは、眼前こゝに  
捨て、も更に惜しからぬのみか、よし惜しめばとて前途の知れた老爺、おもしろい、ぢや  
ア直ぐ此ま、始めませう、貴方の得物は何です、私は此鐵火箸一本で澤山、さアおいでな  
さい」

いひつゝ、一たび閉ぢし老の兩眼しづかに見開いて、坐したるまゝに身を固め息を呑みながら、  
尺にも足らぬ鐵火箸とツて壯士の胸先に差出せば、さすがの志士仁人あツと呆れて此豪傑先  
生さらに顔色なく、

「や、これは甚だ以て、はや、どうも實に恐縮」

「いかゞですな、さア御遠慮なしに、高が死に損ひの敷くちや老爺一人の外に、猫も居りませんよ」

「いへさ御主人、この、この頭の動き鹽梅が御目に止まりませんかな、實に恐縮千萬、何とも令更ら申譯もない次第で、はや寔に、何卒どうか」

「は、ア頭の動き鹽梅とは、碓のやうに、ペこく上ツたり降りたりするこツてすか」

「無論、過ツて改むるに憚る勿れとは我黨の本文、まして御主人の如き野に隠れたる名士に於てをや、全く斯の通り、この通り、」

「は、は、は、さては生命冥加のある人だ、電光一閃おろかの業、この鐵火箸一本ぶつりと貴公の胸腹を貫く筈であつたが、まづ過ツて改むるに憚る勿れ様が早かつたから無事で済みました、重疊々々、しかし以來ちと御心得なさい、道義禮讓は人間平等の持物で、たゞこれ

を取るもの能く天下に横行するが、腕力といふ奴は人間いち／＼強弱の差別あるがため、自己一人いかに威張つても一寸其上手に出逢へば忽ち閉口頓首その如しだ、ね、全體貴公等は個人的の争鬭と國家的の争鬭と一所に混合するから間違ふのだ、國と國との議論は萬國公法の有無に關せず詰るところ戦鬭に決するが、人と人との議論も腕力の勝敗に決するなどといふ、いやしくも法律道德の下に棲息する民心なくてはいかん、わかりましたかね、わからずば御敵手いたさうか」

「段々の御教訓、ありがたう御坐います、ふかく感銘して以後は必ず」

「よろしい、それでこそ男だ、勝つばかりが勇でない、みづから責めて理に屈するもの之を眞の大勇といひます、理に屈する大勇と共に、また忍ぶといふ大勇がなくてはいかん、いはゆる韓信は漁夫の股を潜つたから後日に金と玉との冠をいたゞく瑞相です」

「は、は、は、實に先生は圓轉滑脱の奇言妙言、韓信の股くゞりに金玉を戴いたな、驚きましたな」

「いや御言葉が改まって急に先生といひますな、かりにも貴公の目に先生らしう見えますかね」

「先生、大先生、大々的の先生」

いひつゝ、恐るゝ見上ぐる不出來の面構を、主人の翁じつと冷かに見下せしが、忽然からからと天井を仰いで高笑ひしながら、やがて身を進め兩手を膝上に禿頭つきいだしぬ、

「妙なモンですな、人の氣といふもなア」

「へエ、何故です」

「何故って、先刻からね、私の言つたのは皆うそです、悉く嘘ですよ は、は、は、は」

「え、は、は」

「嘘も嘘まツかな嘘、實のところ私は町家に生れて幼少からの多病で、かく老年に及んでは猶更ら不治の疝氣持、庭箒一本ろくに使ひかねるほどの弱蟲です、これ見て下さい、しかも右の腕の筋が引釣つて鐵瓶一個さけるにも大義な老爺、まづ口だけが達者で、は、は、は、は」

きくより壯士おもはず兩肩ゆすりあけて、俄に光らす眼光すさまじく、握る拳は岩となり身は鐵の跳ね返る猛勢あれど、あまり馬鹿けて無念やら心外やら呵しいやら、あまり弄ばれて我ながら面目次第もなければ、今更ら何と言葉も出でず苦しむ風情を、主人の翁しづかに見遣りて少しも騒がず、

「これさ、私が弱い音を吐いたからって、さう俄に強くならいでも宜いですが、たとひ身は老いて叶はず病んで用ひるに足らずとも、お好みとあらば何時でも御敵手いたしますぞ、あ

れほど貴公を翻弄した結局に自から嘘の本音を吐くんだもの、いざといふ時これに備ふるの覺悟なくては出来ない藝です、だから性根を定めて返答なさい、今度こそは泣いても謝つても許しませんぞ、いかゞです、死生を眼前に争うて決闘しませうか」

いよく出でていよく奇なる主人が言葉に、何とやら氣味わるく腸の底を針に刺さるゝ心地すれど、現在まのあたり見し右の手は癢癢も同然、なるほど疝氣持ときけば腰邊よろゝと役にも立たぬ風情、今まで心付かて散々の嘲弄に逢うたる口惜まぎれに、一番をどりかゝつて握みくれむか、いやゝゝ全く我に勝つべき覺悟なくては嘘の本音を吐くまじ、性根を据ゑて返答せよ今度こそは許さぬとの大膽不敵、あゝ怖ろしくと又もや元の愚に返つて、一入の慇懃に啼き損ねたる鷲鳥の如き聲をしほりて、

「決して、いやもう決して、たとひ嘘にもせよ先刻の御言葉だけは身に取つて全くの御教訓、

この上に何の無禮を致しますものか、しかし御主人、無識短才の我等がため、重ねての御教訓を願ひあけます」

「はゝゝ、貴公わづかの間に餘程の智慧が増したな、しかし何の教訓だね」

「外でも御坐いません、もし萬々一かりに私が、なほ頑迷一點張の無分別で決闘を望みました時は」

「はゝア、その決闘は何うしてする、何を持つてするかと言ひなさるのかな」

「はい、さやうで」

「それか、それは斯うだ」

いひつゝ事もなげに袖中を探つて白紙を捻りしもの、披けば鍛冶屋小僧の鼻糞に等しく眞黒丸薬二個、これを左の掌上に載せて差出しながら、

「これだよ」

「へエそれは」

「見たところ同じ物で、少しも違はないだらう」

「どうしても分りませんな、同じですな」

「ところが大に同じからで、間一髪に人間の死生を決するのさ、即ち一個は毒薬で、呑めば忽ち其まゝの往生、一個は無害で千萬粒を一時に噛み砕いても無事息災、どちらを取るか貴公こゝろみに呑んで見給へ」

「やア驚いた、こいつは驚いた、どゞどうしてそんな危険なものを試みに呑めますものか」  
「呑めないだらう、もし貴公が其中の一個を選択して呑めば老爺あとの一個を呑んで、互に膝を並べ顔を見合して居るうちに凡そ十分か二十分も経つと、二人のうちの一人が冥途

から招かれて苦しみ出すのさ、ね、これぞ全く運を天にまかし命を神に捧げての決闘で、かの刃物三昧やピストル騒ぎの如く強弱巧拙の人為技術に依って死生を争ふよりは、頗る公平無私だから死して遺憾なく生き残って怨まるゝ次第もなしさ、ね、どうだ」

「嗚呼おツかない、喧嘩や斬合も血氣夢中に立騒いでこそ我を忘れて調子よく亂暴に働けるものゝ、たよりないそんな丸薬一個ぐらゐで、互に顔を見合ひながら死ねますものか、氣味の悪い」

「だから實際に死を争うて生を抛つこと銛を砥るが如きものは妙いよ、多くは皆これ一場の狂氣沙汰、一時の逆上から血迷うての業だ、貴公も能く此邊の消息を考へて、以來は手暴な事を謹むが宜しいぜ」

「いや謹みますとも、以後は斷じて壯士營業を止めます、きつと廢します」

「さうだく、全體あの壯士といふものゝ性質が營業になるべきものでないさ、人間こゝに死を決すれば誰か壯士ならざるで、壯士と名のつくなア人の生涯に一度か二度、そいつを營業にして年が年中やたらに壯士がるのは悪い病だ、また今の壯士は頗る妙で物價ますく、高くなると必ず壯士いよく安賣をするから困るよ、無闇にステッキや拳固の抛賣が始まつてね」

「しかし御主人、こゝに一事の困難は、由來の習慣上やら從來の關係上で、壯士を止めると飯が食へません、こいつは何うしたもんでせう」

「なアに車夫でも土方でも立ん坊でもするが宜い、物はいけないと思つたら決して未練を残さず、男らしう枝葉を振り落して元の土から芽を出ささ、それとも實際に困るなら來春早々また來なさい、象の藝ぢやないが三度の飯を食ふ位のことア鼻の先で出来るから」

「それでは今日のところ此まゝお暇を、いづれ三日のうちに伺ひますから、其節また重ねて宜しう」

「いや段々と失禮しました」

「なに此方こそ却つて失敬千萬、何卒御免を」

流石の壯士先生も今は眞實の頓首再拜、脱兎の如き最初の勢に引替へて俄の慇懃ながら處女の如く、首を縮め肩を萎め足音しづかに門を出でむとする折しも、忽ち呼び止められて返れば、主人の翁が半窓より例の丸藥二個を掌上に載せて差出しつゝ、

「如何ですな、どツか御歳暮にでも御入用なら、あけますから持つてお歸りなさい」

「どいどうしまして、そんなものを」

「入りませんか」

「御戲談を、入用あつたら大變です」

「そいちやア私が呑んで仕舞ひませう」

「えッ」

「老の餘命いくばくもなし、いづれ遁れぬ道、何で死ぬも同じコツた」

いひつゝ二個の丸薬を口中へ抛け込み、むしやくくと打喰うて俄に眉を釣り上げながら、死毒の大意はツと見上ぐる壯士の顔面に吹ッ掛くれば、壯士わツと驚いて遁け出さむとするを大聲一番また呼び止めて、

「は、は、貴公は思ひの外に臆病だよ、あの丸薬は毒でも何でもない、二個とも私が疝氣の合藥だ」

「やあッ」

「天下の萬事、人界の諸事、すべて斯の如し、いたづらに腕力を好めば人かへツつて牛馬に及ばず、たゞ智と徳を保てば殆ど神にも到るべしだ、まして片々たる貴公の如き愚者を弄するに於てをや、分ツたか馬鹿野郎ッ」

一度ならず二度ならず三度四度も手鞠の如く翻弄されて、此上うかく長居せば五體の筋骨を悉く引抜かれやせむと、壯士先生ながら生きてる心地せず、帽子を取ツて懷中に捻ぢ込み下駄ぬぎすて、兩手に掴むや否や、あとも見返らで一散に遁け出す前路より、鼠の中折帽子に紺綾の袖外套を纏ひ、金縁眼鏡に鼻高の色白男、壯士みるより倍はと聲かけて、

「き、君、君は例の廣告で来たンぢやアないかね」

「さやう、その蛙面先生の居宅は何處ですな」

「だめく、無効だから止し給へ、あの狸老爺なかく喰へる奴でない、まるで玩弄物にさ

れるンだから、馬鹿々々しい、よし給へ〜」

「は、アなるほど、しかし狸老爺なら汁にして随分と喰へますぜ、また玩弄物にされたなア貴方でせう、お氣の毒千萬なこつて」

「おや、君も變だな、折角、身のためを思つて教へてやるに、え、勝手にしろ」

「固より私の勝手次第、また變人は當然、實はその狸老爺の子息なンですよ」

大きくより壯士またもや一驚を喫し、わつと叫んで其まゝ遁け行く後姿を、しづかに見送りて獨り何をか首肯しながら、やがて此家ぞと思ふ柴の門を入りつゝ、

「蛙面先生は御在宿ですか、廣告の御文面に依つて晦日の大病人一人まかり伺ひました、只今お差支なくば按腹を願ひます」

「や、これは痛み入る御言葉」

「痛み入るは私で、その療治を願ひに出たものです、御免し下さりませうや」

言葉の端なるとやら捻つた奴、音聲どこやらに一物ふくみし奴、いかなる面ぞと外套とつて坐につくを見れば、年のころ三十一二の中肉中背にて、色白い優男なれど眼中脣端の苦み走つたる勢ひ物に油断せず、額際の廣く眉毛の險しき骨相おのづから無頓著の風を現はしつゝ、身には琉球紬の小袖を重ねて大島紬の綿入羽織、白縮緬の襦袢口に地織の紺足袋、茶獻上の博多帯ゆるく時計は金銀いづれか赤銅の蛇鍔を横に巻き付けて、石目うちの張分煙管に貰すばく、あくまで人に馴れ世に馴れ切つたる無造作の間にも、また膝とりくづして席を亂さぬ慇懃の風情、そもや何者ぞ、いづれ當世流の一擱千金を常とせる男ならむが、投機者でもなく會社員でなく貿易商とも見えす製造業とも思はず、たゞばつとして所謂紳商の一部なるべし、しかも言ふ事いちく曲つて謀略ありけに底ふかけれど、どこやらに毛筋の三本



ほど足らぬ心地せられて惜しや才子の才を恃み過ぎたる顔色も見える、

「いやどうも結構な御住居で御坐いますな、時に只今こなたへ参る途中で、壯士風の慌てた男に出逢ひましたが、突然その男が私に向ツて」

「は、ハ、ハ、ハ、お逢ひなさいましたか」

「逢ひますと直ぐ先方から聲をかけて、貴方の事を狸老爺だ、欺されるから止せと申しますのよ」

「は、ハ、ア」

「ところで、ひどく狼狽へた顔色の様子、キツと何か、おどかされた奴と見ましたから、ちよいと戯事に私も驚かしてやりましたら、泡アクツて逃げ出しました」

「なんと仰しやツて」

「その狸老爺の子息は自己だ、と言ツてね」

「妙々、それは妙だった、とかく世には、あゝいふ先生達が多くて困りますよ」

「いや他人事でない、實は私も御多分に漏れない方で斯く伺ひましたのさ」

「とは如何なる御意味ですか」

「外でも御坐いませぬ、先刻も申し上げました通り、これまでの年々は先づ無事息災に越えましたが、今年下半年の不養生が一時に發して忽ち大晦日の大病人、は、ハ、ハ、ハ、枕も上らぬ次第で、どうやら明日か明後日ごろ息つきさうに思ひますが、幸ひ廣告の御文面に依ツて御療治を願ひに出ました、はい」

「それは、ハ、ハ、ハ、とところで御容體は如何ですな、全體どういふ御病氣で」

「さやうですな、外聞つくらふ月夜の提灯で世を張りぬいて來ましたから、まだ世間への破

れ口は聊かも見せませんが、實のところ三四年以前から家臺骨に少々いたみ所が出来まして、店の胸先が支へるやら算盤球の口元が荒れるやら、戸前ぎツちり尻が詰って庫の鉢巻いくたび締め直しても頓と頭痛が止まりませんので、もしや此まゝ表の脘が落ちやうかと日夜に病み煩うて居ります、勿論、金銀湯を浴びるほどに呑めば直ちに平癒するたア存じますが、さてその金銀湯が自由に呑めぬからの始末、何か外に善い名薬は御坐いますまいか」

「なるほど随分と御念の入った御疾病ですな、しかしそれには斯ういふ名薬かと、及ばすなから處方を申し上げたいにも、あまり御言葉が遠磨きの艶すぎて奥歯に絹地が厚く掛って居るやうですから、どうも野暮な老爺風情には確と分りかねます、願はくは俗に解けて平ッたく充分の打明ばなしを伺ひたい、玉兎と吟じても嫦娥と捻つても月は同じですから

な、は、ムムム」

「いや恐れ入りました、しかし其處は流石に身の恥をいふ理の前で、敗軍の將おのづから怯れが出るとやらの諺、ぢやア浮世の幕を切り落して失禮ながら樂屋の體を御覽に入れませうかな」

「それくそれが宜しい、全く舞臺ばかりでは役者の本音が知れませんから」

「舞臺ときけば猶更お恥かしい次第で、實は現在この身に纏って居る此衣裳持物まで、すべて私の物ぢやア御坐いません、さる友達の品で、しかも其友達とて手許にある譯でなく三月あとに曲けて置いたのを質屋の番頭に馴染甲斐の私が捨利で一時がりの粧飾へんべら、今夜の九時を限りに又もとの庫へと逆戻りの體です」

「へエ質屋の番公に捨利の御馴染甲斐がある位ぢやア、先刻お談話の件は悉く嘘ですな、庫

の鉢巻とか店の胸先が悶へるとかの御病状は、たとひ鉢巻にもせよ頭痛にもせよ、あれで  
は大家の傾きかゝった様子で、身代なげだした跡に猶ほ人しれぬ隠金の五千や一萬たしか  
の談話に聞えますから」

「は、は、は、恐縮の至極、汗顔至極、しかし強ち嘘ばかりでもないです、あれは私が十二三  
歳のころ實際の景況で、まんざら根生の貧乏でも御坐いません、もとは日本橋の大通りに  
數代連綿とした十間口の土蔵構作、家を持たした通ひ番頭の三四人も使つて手代小僧を合  
しては二十人たらずの大店、絹絲一切の大名御用を勤めた身代でしたが、何分、私の親  
父といふ奴が榮華に飽いた風流狂者の養馬鹿で、おのれ一代の長者氣取に疊の蘭を撈つて  
も天下通用するものと心得、ありとあらゆる藝人は日夜の出入で、庫を潰して茶室を建て  
るやら、和歌俳諧能狂言さまざまの果が骨董書畫の底拔道樂で、光り輝いた小判を抛け出

して眞黒に煤ほつた物ばかりの穿鑿、營業を餘所にしての白痴沙汰に、どうして家來の始  
末がつきますものか、番頭手代いづれも四つ過ぎから抜け出して掴み金の遊里通ひ、内に  
残つた丁稚小僧が店先の小鍋立、そこで大福餅鍋焼餛飩夜鷹蕎麥も此家を常得意として呼  
ばぬ前から荷を卸す始末に、下女は遠慮もなく來るほどの夜這ひを受け込み、權助までが  
飯米ぬすんで持ち出すやら、家内は忽ち飢脈となつて身代破滅の基、これ幸ひと江戸中の  
貧乏神が家の棟に群がり來つて遊園扇の破るゝばかりに煽いだから堪りませんよ」

「は、は、は、古今ある形ですな、なるほど、そいぢやア全く堪りませんね」

「そこで百年の餘も續いた身代が忽ち五六年の間に木葉微塵、めちやくゝになりましたの  
や」

「ところで親御は何うなさいました」

「さん、榮華の罰が當って頓死でもすることか、あくまで馬鹿運の強い人間で、また聊かの用意金を持って本所柳島の寮へ引込んでも目が覺めず、いや安樂庵の表具だの藤四郎の茶碗だの、やれ萩だ蟲の音だと、結句その昔に變る氣樂住居を風流の唯中と心得て自己一人が死際まで好きな誤託を吐き散らしましたが、偕あとに残った私共が引曲った茶碗や鼻の缺けた達磨の置物を抱へて堪りませんよ、仕方なしに買手を捜せば親父が求めた百分一の潰價で、どうも世間へ須磨の浦うしろに借金山を背負ひつゝ、わざ／＼京都へ人を遣つて無理に望んだ某大納言の秘藏で保津越といふ名鳥これを我形見として貴様の口を減すとも必ず飼餌を忘るゝなど、馬鹿々々しい鶯一羽が自己の子息より大切に思つて遺言するほどの親父ですもの、お談話にも何にもなりませんよ、よくさ軸物と私の生贖と取替へられなかつたです」

「なるほど随分おもひきつた道樂人でしたな、いはゞ先祖代々の餘徳で飽き足らず貴方の分まで取越榮華をなすつたのですね」

「まづさうです、それがため私も十四五から奉公に出て、おのれやれ二十五の曉には必ず家名再興、せめて昔の十分一にも思ひましたが、つい若氣の過誤から港口で舟を打毀しまして、爾來さまざまの苦勞艱難、する事なすこと、あせれば焦るほど深水へ落ち込み、竟に御覽の通り斯くの態になりましたのさ」

「いや段々との御物語まるで一場の小説を讀んだやうに思ひます、時に只今は何を御職業に」

「さアその職業がないんです、」

「ふむ、しかし人間として業のない筈はありますまい、もし眼前その業がなくとも、やがて

「目的といふ奴があるでせう、」

「その目的も度々に外れまして、今ちやア小兒が玩弄物の風船玉と一般、たゞふわ／＼と中有に迷ッて居ります、實に果敢ない始末で」

「職業もなく目的もなくして中有に迷ッてるものなら、失禮ながら破布子一枚でも濟ませうに、たとひ借著にせよ捨利にせよ、一見さながら當世の紳商めいたる其お風俗は何のためです、わけもなく仕立おろしの著物が嬉しい御年輩でなし、猿芝居の衣裳で容を呼ぶやうな御人品でなし、いづれ苦しい借著しても捨利しても其日を飾らなげやアならない御心算があるでせう」

「こりやア酷い、さう激しう斬り込まれては逆も遁れッこありませんな」

「遁れッこのないところを承りたいです」

「ちやア申しますが、實は物の才取です」

「は、ア俗にいふ都合取で、仲買の小なるもの、取も直さず店を張らない仲買ですな」

「お察しの通り、仲買といへば先づ仲買の類です」

「それで多くは、どんな物をお扱ひなさいます」

「どんな物ツて、物に制限は御坐いません、時と場合に依ッては血の滴る生首でも扱ふ位の意氣込ですが、全くの目的は鑛山と炭坑その他に山野の開拓または材木の研出し等です」

「仲買だの才取だの言はれるから、世間普通の其人かと思ひましたに、なか／＼の大仕事、ちやア何ですな、いはゆる山ですな」

「まづ山といふんでせう、世間では」

「一山あたれば一掘萬金、十分一を掘り當てても忽ち千金、随分わるくない談話ですな、し

かし杵で餅つくやうに巧く當りますかへ、全體またその才取といふなア何ういふこつてす」

「杵で餅つくやうには當りませんが、吹矢で軒の雀を覗ふ位には當る心算です、またその才取といふのは、あまり世間に知れ渡らぬ炭山や鑛山で充分の見込みながら資力ないために寶の持腐れ、どうすることも出来ない奴を見付け出して、また一方に慾と無分別と臆膽の三拍子揃った金主を捜すんです、たとひ其山が豆腐蒟蒻にもしろ、その持主と金主を一度引合しただけで忽ち半年の衣食は安樂、もし兩方から乘氣になつて實地いよく利益を見た曉は、何分といふ割を取つて其部を占めるか但しは一時の擱み金で退くか、どつちに轉んでも空手は起きぬ覺悟です、川筋のない深山の材木、人氣のない野原の開拓、すべて皆この理で、とばかりぢやア、たゞほつとして黒闇の針を拾ふやうな藝で、馬鹿ア言へ貴様

一人が然う巧く遣れるものか逆も無効だ、寒中に汗を流して車を曳くものさへあるでないかとの御言葉も御坐いませうが、さて其處にまた萬々委細の手段工夫があつて、普通世間の目鼻に逆も無効だと笑はるゝだけに案外仕事が遣り易いです、現に私が鑛山を一事かゝつて居りますが、來年の二月か三月おそくて夏の初期ごろまでには大地の搥、きつと當る筈に駸々と運んでゆきます、とかく今日の如き時勢では猫も杓子も出来る容易い業か但しまた規矩繩墨を飛び放れて馬鹿か狂者のする事でないやア、却つて道理らしい通常の營業がむづかしいかと考へます、ちと生意氣なやうですが、男子生涯たゞ一度で乗るか反るかの一六勝負が面白いですな、年が年中いつも小さい損益に離脱して死ぬまで氣を揉んでも詰りませんからね、はゝゝゝ」

「いや、どうも大きい、氣焔萬丈あたるべからずで、實に恐れ入りましたが、もし男子生涯

に一度で乗るか反るかの一六勝負なかつた時は」

「そりやア仕方がないから、不運と諦めますさ」

「ぢやア矢張り捨利の借著で押通す御心算ですか、いや押通せるものでせうか」

「通せなきやア萬事それまで、宿志の尺が取れずば汗水かいて一寸や五分を取つても呵しう御坐いませんからな、よしんば落ちて乞食になるとも」

「は、ア、これほどの膽畧にも似ず、先刻の御言葉に、一家破滅の後さんぐの苦勞艱難あ

せれば焦るほど深水へ落ち込んで斯く果敢ない様と、しをくせられたが、ちと前後不揃

ひのやうに聞えますね」

「なアに、ありやア單に過去の失敗と目下の落魄を訴へたのみで、只今のが全くの地金です、

前途を思やア火水の中も厭はない胴骨を据ゑて居ますさ」

「なるほど、それでは生涯に一度きつと其大仕事あるとしたところで、何分にも金貨銀貨を

そのまゝ掘り出すでなし、七重八重の岩で包んだ山を見掛けての談話、たとひ技師の測量に

しろ器械の精銳にもしろ、鑛山で世に聞えて居るものは日本國中に十人あるか無し、鑛山

で家を潰したもなアそもく幾萬人でせう、しかし貴方は所謂才取だから其心配もない

譯かね」

「まづ左様さ」

「してみると何ですな、來年の三月とか四月とか現に一仕事おかゝりの目的、これが生涯一

度の一六勝負で、もしや萬に一つも瓦落離と外れた曉は、もはや諦めて乞食なざる心算

ですな」

「いや、さうぢや御坐いません、萬一それを外せば、また新に幾度やぶれても更に屈せず撓

まず、あくまで遣る覺悟です」

「は、ムムムどうやら御言葉が亂れて、御主意が矛盾して來ましたな」

「何故です」

「何故ツて、それでは生涯たゞ一度の勝負でなく、やはり生涯たらくと追ッ通しの勝負ですもの、就いては先刻の御説に、年が年中いつも小さい損益に離離して死ぬまで氣を揉む奴は馬鹿だと言はれたが、年が年中いつも雲を掴むやうな巨大な法螺で損益どころか頭から當にならない事に氣を揉む貴方は何でせう」

「へエ」

「へエぢやアない、他人の私に言はずとも昔全盛を語るため、死んだ親父の白痴沙汰から一家殞落の有様を面白をかしよう喋々と陳べられた流水の辯を持ちながら、今日それほど大

望ある男一貫が自分の胸のうち、お答の出來ない答は御坐いますまい」

「はア」

「はアでも、ばアでも、今この場に及んで俄の黙々は卑怯ですよ、何とかお言ひなさい、全體貴方の言葉は無用の平凡理窟のみ澤山で更に少しも要領を得ない、たゞ自己が駄才を高慢の鼻の先にぶらさけて心に一點の眞實がないから無効だ、鷹が飛べば糞蠅も飛びたがる世の諺、横に這ひ出す蟹の目の上にはばかり著いて猿の手長しといへど尻に及ばぬ笑止千萬、しかも理に疎きものは恥辱を知らざる金言で、その面の皮でも熱い寒いが分りますかどうです」

隙間もなく疊みかけられて流石の法螺の貝も此上に吹き立てむ勢ひなく、いづれ其うち參上といふや否や外套かへしまゝ慌てゝ遁け去る當世流の猪鼻助が雛形、足音いそがしけに門



を出づるころ、引違へて音もなく飄然と入り來りし小男は、二十七八の血氣にも似ず顔色青ざめて骨たかく、見苦しからねど双子の布子に久米綿の綿入羽織、左に書物めいたる風呂敷包みを携へて右の手を懐中に差入れながら、どこやら身軀に沈めるが如く、さりとして眉を聳むる風情もなく、どこやら心に平ならざる如く、さりとして物事あらくしくもなく、四邊みまはして聲しづかに來訪の意を通じ例の一室に主人の翁と差對ひぬ、

「春も宜しいが、この邊の冬景色また趣味が深いやうですな、時に御主人、甚だ突然ですが蛙面馬耳郎といふのは如何なる御意味ですかね」

「は、は、は、さう改つての御尋問では困ります、あれは唯ほんの老爺が一時の戲號で、蛙の面に水、馬の耳に風、一切世間の事に頓著すまいといふ意味です」

「これは面白い、當意即妙、しかしそれは悲觀的から世を厭うた意ですか、また樂觀的に人

生を嘲つた意味で御坐いますか」

「俵いよくむづかしい御尋ねですな、全體、貴方は何を爲さる方です、失禮ながら矢張の御修行中の書生さんと見受けませんが」

「私ですか、私は詩人です」

「詩人、まさか當今の時勢その御年輩で所謂儒者風の詩人でも御坐りますまいし、ぢやア何ですか、此ごろ流行る新體詩とやらの詩人ですな」

「なアに詩人に文字上の差別種類は御坐りませぬ、たゞ詩人です」

「は、ア分りました、ぢやア例の詩人ですな」

「例たア呵しい、何の例です」

「いや別段、例といふ字に仔細も御坐りませぬが、たゞ老爺が胸裡に會得さす相圖の言葉で

す、俗にいふ物の符牒と同然です」

「符牒、相圖、こりやア怪しからん、いやしくも宇宙の無言無色を歌ふて生靈に美の露を與へむとする詩人を遇するに、赤穂の夜討か大工の受取普請か何ぞのやうに符牒や相圖を以て叨りに御差別なさるんですか、元來この詩といふものに如何なる解釋をお持ちなさいます、清く大きく高く美はしく殆ど人間の言語を以て窺ふべからざる天使に等しき詩の本來を、例の詩人かなどとは、甚だ其意を得ないこつてす」

「いやこれは恐れ入りましたが、恐縮ついでに聊か伺ひます、仰せの詩人は矢張り御飯を召上りますか」

「妙なことを、人間です」

「なるほど、ところで何うして御飯を召上ります、ちよいと御作の詩でも吟じて居る前へ地

の底から米鹽が湧いて出たり乃至また優れて高妙深遠の時にやア忽ち紫雲の間から牛が葱を背負つたり家鴨が焼鍋を被いだりして降つて來るとでもいふ理ですか、いやさ御怒憤なすつちやア困ります、どうか御氣に觸へないで」

「なに氣にも觸へませんが、あまり御言葉が枝葉に渡つて嘲弄の意を含んで居ますから」

「いや決して嘲弄などと恐れ多い、たゞ何を以て衣食住なさいますと伺うたのです」

「なにッて、詩人また人間ですから、それく物の報酬に依つて求めます」

「報酬、報酬にも種々と御坐いますが、詩人の報酬、まづ現在こゝに詩人としての貴方は目下いづれから衣食の料をお取りなさいます」

「さやう差當つて著述上からですな」

「はゝア御著作、いはゆる御詩作の文字を書肆へでもお賣りなすつて、その原稿料ですな」

「まづ左様、本屋どもが唯これ利を目的に迫りますが、私はまた別に自から信ずるところあつて言ふがまゝに授けます、原稿料が一枚で幾何などといふ金銭の多寡に依つて詩を撰ぐ意味ぢやアないですよ」

「無論、さうでせう、たとひ萬金を積んでも詩とやらの一端を買ひ取れる道理は御坐いませんから、しかし事實に於て詩が即ち貴方の米鹽ですな」

「さう言へば、さうです」

「ところで、御作の詩の徳に依つて全く人間の高く清く美はしく大に感化した證據でも御坐いますかね」

「さア其證據です、いはゆる大聲里耳に入り易からずで、今日世間の觀念が未だ幼稚なるがため詩の高妙を解し得ませんから實に困りますよ、なれど解し得ないからつて詩人こゝに

怠れば竟に詩の光輝を發揚すること難く、また詩人の職として宇宙の靈妙に濟みませんから、かく殊更に肉體の度を低くして自から恥ぢず、いよくこの心を高く養つて居ります宛も山間の人なき幽谷に蘭は蘭として其香を失はざるが如く」

「ますく御高説、實に感服いたしますが、いかに天使と等しい詩人だつて下界に御住居の以上は、まして御飯の種として居らるゝ以上は、この年の暮に際して多少の浮世沙汰いはゆる俗務に御關係なさいませうな、たとひ嫌だと仰しやつても萬やむを得ず」

「無論です、随分いとふべき俗用に迫られて金玉にも代へ難い時と生命にも代へ難い美の觀念を汚すことも御坐いますが、また翻つて深く思へば、俗務俗用むしろ却つて津々たる詩趣がありますよ、今日も本郷神田淺草邊を通行しましたが、かの息が通ふために人間らしい動物が頻りに銅臭を逐うて東西南北に馳せ違ふ景況、宛然たる百鬼夜行の體で、平生

は人生の裏面に潜伏せる罪といふものが一時に形を現したやうに思ひます、それに引替へて向島の土堤を飄然として歩めば、三春の花題いつしか去つて萬木こゝに死せるが如く、わづかに残る梢の枯葉がヒラ／＼と散り來つて私の額際を軽く叩いた無情有情の境は、取も直さず其まゝの詩ですな、詩人かく常に貧しけれど喜怒哀樂の起るところ寂寞無聲の閑たるところに凡ての富を有して居りますから、ますますその富を積まむとして身はいよいよ世上凡俗の貧に落ち入り、睡れる龍髯たまく／＼雀の嘴に突つかれるなど滑稽を學びて是また詩ですな、あゝ詩人なるかな、詩人なる哉」

「段々むづかしくなつて老爺風情には解しかねますが、つまるところ詩人といふものは俗世界の外に超然たる批評家もしくは指南車のやうなものですか」

「ちと解釋が浅いですが、御主人の御言葉としては先づ意味に近い方ですか」

「そこで、もしこれを小さく卑近に取れば、人の門外に立つて自分の身は露に濡れ霜に打たれ犬に吠えられながらも、しづかに家内の様子を窺うて氣を揉むやうな譯で、いはゞ乞食、これは失禮、まアさ心の高妙深遠は兎も角も、凡眼には乞食と間違へられても仕方御坐いませんな、勿論お怒りもなさるまいし」

「はゝゝゝ妙な比喻ですな」

「しかし古の聖人か盜賊に似て居つた凡例もあり大智の佛が癩病に現じた事もありますから」

「さやう、先刻も申した通り、肉體の形は乞食でも穢多でも何でも宜しいです」

「ところでさ、その詩なるものを音楽に譬へて、替女のほうが弾く門づけの三味線と家元の太夫が高坐で弾く三味線と、どちらが早く人を感じさせませう、まづ巧拙の點は俵お

て」

「何だか、話が變に混み入ッて來ましたな」

「なアに混み入ッた譯ぢやア御坐いません、こゝに同じ力の詩人があッて同じ俗界を相手にする場合、門戸を構へて廣く人に知られた詩人の詩と下宿屋の食料を踏み仕して遁け廻るやうな詩人の詩と、いづれが深く人を感動して能く其美を發揮しませうかね」

「そりやア御主人、同じ力で同じ場合で同じ物を相手に吟するにやア、貧にして狭からんよりは貧ならずして廣き方が宜いでせうな」

「そこです、もしそれならば矢張り詩人にも貧富利害の數があッて、折角の神韻に自づから深淺厚薄を來すやうですから、失禮ながら貴方も暫らく詩人を止めて、まづ衣食住の料を貯へた後、思ふまゝに吟じたら如何です、もし詩の外に衣食の道がなければですが、ある

段か盲目の按摩さへ自己一身の米鹽は握み取ッて闇の世を渡りますもの、まして元來その詩なるもの御飯の種としては聊か不相應の品でせう、願はくは詩人屋の職工とならないでね、また本屋風情に迫られて生涯長篇の一大詩趣を勿體ない其日々々の片崩しに賣り缺かずとも、しづかに悠然として食傷するほど宇宙の美を喰ひ人生の何とやらを呑み込んで、いざ吐いたと來たら千歳の後なほかつ人をして感謝隨喜せしむるほどの御決心で、たとひ貴方の形骸は、曉の霜と共に消ゆるとも、貴方が吐いた詩の生靈は長く人界に神の如き微妙の聲あッて亡びざるやうにね」

「無論、お説の如きが畢生の目的ですが、何分にも」

「何分にも、出來ないと仰しゆるんですか」

「いへ、さうぢやアない」

「さうでなけりア、どうです」

「どうツて御主人、實はその、なんです、あの所謂、元來それ、詩なるものがね」

「あの所謂元來それ詩なるものとは、全體いはゆる元來どの詩なるもんです」

「これはいかん、どうも今日に限ツて思ふことが、え、取も直さず其、甚だ靈妙なもんで、不思議なもんで、神韻飄渺の間に、何か一物の人間に感ずる、いや矢張り不可、ふしぎだ、今日に限ツて、たしかに咽喉元まで出て居るんだが」

「咽喉元まで押上げて居るものを無闇に茲へ出されちやア困りますぜ、すぐ便所は其處ですから」

「いへさ、これは怪しからん」

「は、は、は、どちらが怪しからんです」

「なアに唯その、一朝一夕の言語に盡せない事があつて、それを今こゝで、いや斯う致しませう、近日のうち詩に就いて一篇の論文を寄せますから」

「なるほど、ぢやア謹んで拜見いたしませう、おついでに御高作の詩も、いたゞきたいもんですな」

「承知しました、幸ひ近作に戀と墓と樂天の三題で吟じたのがありますから、其詩を贈りませう、時に今日は先づ此まゝ御免を蒙ります」

「それでは、いづれまた其うち御ゆるりと入らツしやい、おや、しかし大分に風が吹いて来たやうですね、定めて向島の土堤に枯ツ葉の散りやうも激しう御坐いませうから、いぢく眞向額にうけて宛然そのまゝの詩趣に嘸おいそがしいこツて、しかも此處から吾妻橋まで凡そ小一里、のべつ幕なしの詩ぢやアなか／＼お骨が折れますね、どうか此上に雨で

も降らなげやア宜いが」

詩人の詩人たる所以、何を言はれても更に感ぜず、たゞどこまでも神韻飄渺として出がけに下駄の齒を踏み返しつゝ、南無三よろくと槇の木の枝に横面を引掛けながら、頬の邊に蚯蚓ばれの磨疵さぞや痛からむに、これまた宛然たる詩趣粉々、歩きぶりさへ風に靡く薄尾花の如く墓場を抜け出でし人魂の轉がりゆくが如く、唯ふわ／＼として立去る折しも、足早の靴音さながら小田の蛙の啼音に等しく入り來りしは、三十四五の男、あるかなきかの八字髭しよんほりと鼻下に蓄へて、小豆茶の色さめたる山高帽子に笑渦を現はせど、顔には更に愛敬もなき思案の體、身に纏ひし黒綾の洋服も幾年を経て自然に髹染みつゝ、わけて肩の山形より一入さらに肱の曲節をかけて白みわたれる風情、この寒中に外套もなくて毛絲の手袋のみぞ赤編勝に際立てる風情、ポケットの中より小風呂敷の端にや紫の唐縮緬ちらと差覗け

る風情、さのみ背も高からぬに猫脊を出して物を仰ぎ見ぬ風情、さては或官省の小吏員い つも局長に睨まれ課長に恐れ入って戦々兢兢たる慣ひ竟に性となりけむ、まづ其給料は判任官やう／＼十五圓か二十圓までのうちにて、故郷より呼び寄せし貞女の細君が賃仕事に依つて時に或は日曜の榮華を喜ぶ類なるべし、遠路わざ／＼の來訪しかも例の廣告を見て打明談話せむとの心、いづれ其まゝ歸るべき筈もなきを、たゞ一度の案内にては直ちに室へ入らず、幾度か無用の辭退をしての後、始めて坐到著きながら更に慇懃の挨拶、

「え、年末さだめて御事多う在らっしゃいますやうが、かの新聞廣告を拜見いたしましたして」

「よくこそ、さア御遠慮なう、膝をお崩しなさい、洋服の小笠原は窮屈ばかりでない、重箱に西洋料理を詰めたやうで却って變ですから」

「はい否なに、これで結構」

「でも御坐いませうが、それでは萬事うちとけませんよ、何だか物に隔意があるやうで」

「はい、はい」

「時に御見受け申せば、官吏の御様子ですな」

「はい、官吏と申しても、たゞほんの端た吏員で、小使も同然の者で御坐います」

「さう何事も御謙遜すぎてはいかん、どうかね、ひらツたく願ひませう、官省は何處ですな、はアなるほど、さうですか、しかし随分お忙しいでせうな」

「多年の間これに馴れて居りますから、別段それほど忙がしいとも思ひませんが、何分にも私共は下級の者で少しの餘暇もなく、朝は第一番に出まして退廳は第一番に遅く歸らなげやア、仕事の有る無しに關せず局長や課長の氣に入らないです」

「いや全く其邊の事情が御坐いませうな」

「ある段ちやア御坐いません、小吏員は凡て仕事の上手下手は倍おいて、まづ局長課長の氣に入ると入らないとで大變な相違が出來ます、いくら議會や新聞や世間で喧しく騒いだつて、官海の内幕には情實朋黨の根が生えて言ふに忍びざる枝葉が繁つて居りますから、私共のやうな氣の小さい馬鹿正直の者は、どうして宜いか全く途方に暮れる事が御坐います」

「いはゆる吏臭の凝結したものですな」

「さやうで御坐います、その吏臭の最も粉々たる人が、出世も早く名聞も善く羽振も強くて、その割に仕事が寧ろ樂なんですから」

「なるほどね、時に貴方は官吏とおなりなすツてから、おおよそ幾年ほどに」



「さやうで御坐います、お尋ねにあづかつて甚だ汗顔の至りですが、もはや前後二十年ばかりに」

「え、二十年、つまり二昔ですな」

「はい、水の底の鐵掘で、いつまで経っても頭は上りませんが、二十年間をこたらず勤めました、その間に病氣届を出したのが七八度も御坐いませうか」

「へエ、二十年おッ通しの御精勤で、その間に病氣届か五六度、へエ、御朋輩のうちにも又と二人は決して御坐いますまいね」

「まづ、御坐いませんな」

「ぢやア萬事の古參として、定めて事務には御練達、いはゞ省中の生きたる歴史ですから、いくら長官が變更しても、徳義上、必要上、貴方の地位だけは動かすこたア出来ませま

いね」

「まづ其點だけは安心で、何の役にも立ちませんが、随分私でなげやア分らない事も御坐いますから」

「でせうとも、それが官吏だからですが、もし會社とか其他すべて民間有益の事業上なら、たとひ新聞紙一枚を読み兼ねるほどのモンでも重役か支配人ぐらゐは盆大の印形を捺して確固ですな、個人的利害としては往いて再び還らぬ人間の歲月、失禮ながら惜しい事をなさいました、しかし現今の等級にしたところが、なか／＼軽くは御坐いますまい、いづれ其うちの最たるもの、範圍内の許すかぎりをお取りなさいませう」

「ところが實に申し上げるも恥かしいこつて、やツと判任の七級、しかも去年の暮に」

「へエ、いや承る毎に、たゞもう、へエです、全體貴方の御履歴は何ういふ次第ですな」

「それをお話し申せば取も直さず自分の不甲斐性を演べるやうな事で、實のところ私は舊幕臣の子息で御坐いますが、例の通り土族の商法で親共が失敗いたしました爲に充分の教育も受けられず、明治十年かの西南戦争の砲ある人の周旋で給仕に出たのが最初です、その給仕で丸三年、やうく七圓の傭吏となつて十圓まで昇進するのが五年の春秋、等外と名が付いて一年半、やつと龍が天上でもしたやうに判任の最下級に上されたのが今より九年以前、しかし學問のある身ではなし腕敏のある身ではなし、飛んでも跳ねても前途の知れた境涯ですから、たゞ勤務大事に今日まで一日の懈怠なく、また何一事の過誤もなく、持つて生れた馬鹿正直と精勤緻密の一點張りに押し通して來ましたが、いかな私も今年こそ、實に、いかに私とて、實に、實に堪へ難い言ふに忍びざるほどの不快を感じましたから、來年の春さうく辭職の決心で居ります、たとひ明日から菜葉を賣つて歩かうと

も、いや全く、もうく官吏なぞア生命に代へても出来るもんぢやア御坐いません、店前に一文二文の駄菓子を並べて楊子削りの内職をするとも、孫子の代まで端た役人なぞア決して爲すもんぢやア御坐いません」

いひつゝ拳を握り口惜しけの涙を含んで、しばたくく兩眼に八字髭さへ水鼻の悲憤慷慨、果は猫背いよく丸めて顔も得上げず、男泣きの齒を噛んで火鉢に取付く風情、事の仔細は分らねど何とやら哀れを催して、これが二十一年間に病氣届たゞ五六度の小吏員かと思へば、いとゞ一入さらに慘憺の心地しつゝ、主人の翁しづかに慰めていふ、

「それほど永年の御精勤なすつた貴方が、火急にそれほどの御決心、いづれ一方ならぬ事情が」

「御坐います、あります、實に、いかに私が尋常を外れた馬鹿律義でも」

「全體、どうなすつたんです」

「なに外でも御坐いません、もし餘所から御覽なすつたら呵しい位のこつてせうが、現在の場の我身になつてみると、實に腸が湧返るやうで、實にいよく決心いたしました」

「しかし、その御決心の理由が」

「それは、あの斯うです、先刻も申し上げた通り私は學問もなく業もなく、ほんの聊か事務に馴れて居るといふのみですが、また私共の下級官吏では、學問や業よりも事務の熱練が肝要で」

「いや全くですな、役所の帳簿を睨んで哲學の講釋しても始まりませんからね」

「さやうですとも、そこで先づ私が多年の經驗と及ぶだけの勉強とで、甚だ自慢のやうですが二人分の仕事は出来る心算です、いや現在やりつゝあるんです、まして今年の一年と

いふものは俄に事務の繁忙を來しましたから、一朝も他人に後れた事はなく、また退省の時間より必ず二時間以上は居残つて、煙草を喫む間さへ惜しむほどに仕事を致しましたので、従前の履歴は儲おいても、もしやこゝに年末の昇級賞與などには筆頭第一、決して外れまいと自信して居つたところが、實は案外、豈圖らむや、ついこの夏の初め地方から轉任して來た課長の甥と、いつも局長の宅へ出入して書畫骨董の周旋などする男と、私が事務上から意見を異にして論じ合つた以來さらに物も言はない奴と、以上三人いづれも同級の者が一時に昇進しながら、私は慰勞金どころか、あゝ事務を滞滯さしては困る氣をつけてくれと、わざ／＼御用最終の當日に課長の前へ呼び付けられての大目玉です、實に以て何ともはや忍びがたき無念で」

「なるほど、そいつア定めて御無念でせう、いかにしても局長や課長が分らない奴ですな

なるほど、いや御道理の次第で」

「そゝそれも宜いとして、甚だしいでは御坐いませんか今の局長が妾の親父で、ことし六十有餘さらに何の彼にも立たない爺を二十圓の傭員に、しかも役所の事務を執らさないうで、何だか自分の私用ばかりに使つて居る様子です、ところが其爺奴が、精勤勉強の功として給料半月分の慰勞金たア、實に呆れて物も言はれない始末、まづ私なんざア辭職しろと言はないばかりの取扱ひです、だから寧ろ、ぐづぐづして先方の御指示うけないうち、おもひきつて此方から退いてやらうと考へます、その代り私も尋常は退きません、内幕の醜聞を悉く世間へ暴露させてやります決心で、お談話申せばまだこの外に鼻持のならない臭味が御坐います、もし新聞へでも投書すれば忽ち大騒ぎです」

「いづれの諸官省にも、随分これまで善くない風聞があるやうですが、まさかそれほどち

やアないと思つて居ましたよ、へエ、實に官吏としては醜の醜たる極ですな、民間で官紀刷新を叫ぶも無理はない」

「私も今までは其醜の醜なる極に住んで居りましたが、現在その醜の我身に及ぼさないうちは兎も角も、頭上から浴せかけられて今年といふ今年の暮は、實に残念で堪りません」

「段々との御述べ懐も、また此度の御心中も察しますが、何分にも二十年からの御勤續なすつた生涯唯一の業を、唯一朝の憤怒に乗じて」

「いへ、それも種々さまざま、思案に思案を重ねた上の決心ですから」

「でせうがね、時に貴方は御獨身ですか」

「いや妻と二人住居ですが、母と妹は父の歿して以來、里方の故郷で、これにも月々幾何づの送金をいたして居ります」

「よくまア、さて妹御は未だ何處へも」

「はい、まだ縁付きませので、これも私が他日一事の荷厄介です」

「なるほど、貴方は細君と御一緒に、阿母さんは妹御と御一緒に、互に國を隔て、以上四人ぐらし二軒の住居、それを失禮ながら僅七級俸ぐらるで、いや實に御骨が折れませう、ところで、もし貴方が辭職なすツても何か外に相應の收入が御坐いますかね」

「さアそこです、それがため今日までは石蝟のやうに、一所懸命の勉強を致しましたが、もうその精も魂も盡き果てまして、たとひ明日から如何なる賤しい業に身を落すとも、はい、かつ妻にも委細うちあげましたところ、聲をあけて泣きながら口惜しがりまして私へ申しますには、せめて子のないが僥倖、これから夫婦共稼ぎで誓ひ木屑を拾ツても夜の目を寝ないでも死物狂ひに働くから、男らしう思ひきツて辭職して下さい、二十年も瑕瑾な

しに勤めた結句、破れ洋服一點のまゝ先方から突き出されては此世に生きて居る甲斐がないツて、實に、音さへ苦しい物價高直の大晦日を眼前に控へて、夫婦ともく無念やら心外やら泣きの涙で、はい、殆ど人間の無常を感じまして、いッそ此まゝ山の奥へでも這入りたい心地がいたしますに、それとも知らで國の母より昨日の手紙にも、なぜ子が出来な、はい、はやく孫を抱いて來年の夏期休暇には夫婦で來てくれ、ついでには御役所大事に勤務を怠るな、同僚の人達に憎まれぬやうせい、また局長さんや課長さんの御宅へは折々うかがツて、なほ行末の出世をお頼み申せて、實に、實に何とも、たゞ堪りませんです、腸が千切れるやうで、かつその手紙の末に、汝が下女の一人も使ツて旦那様と言はれるのを聞いて死にたいと、こゝこの一節を讀む時にやア、さすがの私、おもはず兩眼の涙が、ほろ／＼と滾れまして」

ふざけたる老爺かな、人間の皮肉も一夜に瘦せなむとする大晦日を、おのが一場の玩弄として蛙面馬耳郎と名乗りし主人ながら、あはれの眞實に打たれては洒落も理窟も消え失せて、坐にも得堪へず其まゝ起ちしが、やがて一封の紙包を持ち來りて差出しつゝ、

「もし御氣に觸つて御憤懣なら老爺も自暴だ、お相手となつて飽くまで喧嘩する覺悟の上にてこれを進じます、お受取り下さい」

「えゝ、これは」

「それは失禮ながら貴方が今年の暮に役所で貰ふべき筈の慰勞金です、わづか一月分の給料ですが」

「えゝッ」

「筋が違ひませうさ、縁もない老爺の手から出る千圓よりも、その局長や課長の手から出る

一圓の方が、貴方の身に取つて有難いことを承知して居ますさ、また老爺がその局長や課長づれの爲に貴方の不平不快を慰めにでも何でも無い、たゞ貴方のために貴方の御心中を和らげるためです、定めて嫌でも御坐いませうが、どうかね、そのまゝ老爺の皺面を立てゝ下さい」

「否、いへ〜、たとひ如何やうな理由があつても、始めて伺つた私が」

「さゝ然う仰しやると物が面倒だ、たゞ黙つて斯なものを此處で拾ふのさ、もし御氣に觸つたら喧嘩を覺悟の前とは念をおして置きましたよ」

「へエ」

「なるほど、男としては、いや女の細君にしても、あれほどの御立腹が他人の手から出る金銭で押へられる筈は御坐いません、なれども、お國の阿母さんや妹御の行末を能く御熟

考なすツて、いはゆる短氣は損氣、とはいふものゝ、老爺は決して人に意氣地を捨てるの踏まれても蹴られても死ぬまで堪忍しろのと、そんな腰拔な吝な料簡で申すのぢやア御坐いません、ひらツたく無遠慮に言へば、そもく、今日の時勢に二十年間も小心翼々として僅少の俸給で精勤して来た貴方には、やはり短氣は即ち損氣、少々の不平は泣寝入で此後なほ御勤續なさる方が却ツて身のためでせうと考へます、その官省の醜が貴方一人の有無に依ツて存亡するものでなしさ、現在また貴方の身に及ぼさなかつた以上は矢張り其醜の中で御精勤なさるんでせう、してみると單に一場の小波瀾、いや波瀾までゆかない始ど小池の漣で、いや水ツ溜りに蠅が落ちたほどのこツて、貴方に貴方、失禮ながら高が俗吏の寄合ですもの、局長だツて課長だツて同じ刀筆吏に聊か毛の生えた奴、さう角に取ツて自分の身を動かす價値はありませんよ、はゝゝゝゝゝゝ」

「へい、左様ですか」

「左様ですとも、しかしました、それほど御精勤の貴方を先方から突き出した曉は、其時こそ始めて一期の大憤懣、大不平、大議論、おもふがまゝの振舞をして、一泡アツと驚かすも妙ですがね、まづそれまでは何事も庚申塚の三猿を守ツて、見ざる聴かざる言はざるが却ツて今の身に取ツて貴方の一見識ですよ、そいつを此方から狼狽へ騒いで辭職するなごア、むしろ敵の笑ひものになりますからな、こゝは是非とも一番うんと、ね」

「いや段々と骨肉も及ばぬ御意見、有難う御坐います、しかし封物は」

「それは先刻も度々申し上げた通りの意味ですから、御遠慮なく、をさめて下さい」

「では御坐いませうが、何分にも」

「よほど物堅い方だ、ぢやア斯う致しませう、失敬ですが正月の御小遣として御用立てま

すから、三年か四年の後、それも御都合の宜い時分にお返し下さい、ね、勿論いはずとも  
のこつたが無利息ですよ」

「はや何とも御禮の申しやうが、それでは暫らく拜借いたします、時に今日は生憎検印ばかりで  
實印を持参いたしませんか」

「は、紙に書いた物なざア入りません、たしかに借用といふ貴方の御一言が盤石です」

「この御恩は決して、決して、忘却いたしません、私が生涯の日記中に特筆大書して子孫  
にまで」

「いや、どうも痛み入ります、御挨拶に困りますよ」

「早速妻にも申し聞けますが、諸どんなに喜びませう、國の母へも」

「いや、細君へは宜う御坐いますが、阿母さんの方へは御止しなさい、無用のこつてす、と  
かく年寄は物事の取越苦勞しますからね」

「はい、では、いづれ近日あらためて御禮かたく伺ひます、はい、はい、どうか其ま、お  
起ち遊ばさないで、はい」

起際に火鉢の灰を掻き均し茶碗を臺に伏せ坐薄團を此方に片寄せつゝ、あはれ踵の破れし靴  
足袋を摺足めいての慇懃鄭重、さながら麻烏を摺むが如く例の猫脊を丸めて中腰に立去りし  
程もなく、綱曳と覺しくて遠音に響く韋駄天走りの人車やがて門前に停れば、外套も略帽も對  
の濃紺仕立に麻裏草履の鼻緒と足袋のみ白く際立ち入り来りしものあり、わざとならぬ大  
様の言葉に案内を乞うて、ひかるゝまゝずつと一室に打通りつゝ、坐に著くを見れば五所紋  
黒縮緬の綿入羽織に同じ平御召の小袖を重ねて、胴著長繻絆その他も凡て至れる穿鑿、しか



も萬事に改まりし風情なく、たゞ平然としてマニラの細巻を薫らせつゝ、おもはず主人の翁と顔みあはせて俄に心付けるが如く始めて軽く會釋を施しぬ、年のころは二十三四、顔色青白くして目は細長く鼻と頤のみ尖りたるを、前に突き出しながら下目づかひに物を見る癖あつて、感冒をや召されけむ、しきりに袂より白綾のハンカチーフを掴みいだして邪慳に鼻うちかむ容體、さては大名華族の若様なるべし、その身分は公侯にもあらず子男にもあらず、およそ伯爵の家に生れて氣隨に育ちし我まゝの君、もし昔ならば御酒宴の場を諫められて忽ち御佩刀に手をかけ給ふ類ならむが、今は氣に入らぬ事ある度に三太夫の額際びしやりと扇子でまるらるゝ癩癩玉なるべし、主人の翁それと見て膝を進めつゝ、

「いづれ様に御坐います」

「私か、私は麻布に住むものだよ」

「さやうで御坐いますか、お見受け申したところ、あの馬鹿けた廣告文で、わざわざ尊來の御身分とも存じませんが、いかなる思召で」

「別段さして用もないが、あまり面白い廣告だから、どんな人か一寸逢ひたくつて」

「それは、その當人は即ち御覽の如き皺だらけの梅干阿爺で、はゞななく御談話の御相手は出来かねますから、いッそ此方より伺ひませう、時に明日の大晦日といふもの如何おほしめすか、お心に浮んだ通りを、どうか其まゝ伺ひたう御坐います」

「さやう、まづ矢張り忙しいな」

「何の御用で」

「いろく用事があるよ、年頭の仕度なぞ」

「なるほど、御年頭の御仕度また格別で御坐いませう、して其外には」

「その外に別段ないやうだね」

「御坐いませんが、してみると大晦日は取も直さず御年頭の御仕度日で、大晦日そのものは更に御用のないと申すやうな次第」

「いや、例年は然うであつたが、今年、ちと人にも言ひ難い義が、それ故なかくの心配で」

「はてな、人にも言ひ難い御心配、この大晦日に、はてな、まさか金銭上の事では御坐いませぬ、世間普通の義では御心配の種になるべき筈もなし」

「わかるまい」

「いや暫くお待ち下さい、易者では御坐いませぬが、御身分が御身分だから大抵のところを」

「萬一これが分れば、あの廣告文に秘密を守つて物の相談にも乗るとあるを幸ひ、うちあけて意見を聞かうため、わざ／＼來たのさ」

「その思召に對しても此まゝお歸し申しては、甚だ老爺の估券が下りますやうな次第で、と、まづ斯う御止め申して置いて、は、は、どうやら分りかけました」

「何、わかりかけた」

「はい、もし間違つたら御免を蒙りますが、全體これは人情の上から出來た事で、萬一あらはれた時は御家風に對して濟まないといふやうな義で御坐いませぬか、かいつまんで申せば、お心どほりに遊ばしたいは山々ながら親御様や御親類などの手前どうやら面目なく、また昔氣氣の御家來衆が喧しう御諫言申して、お身は一代お家は末代など、四角ばるため、つい打明けかねて獨り御苦勞の次第では御坐いませぬかな」

「や、これは妙、實に妙だ」

「あまり、大した相違は御坐いますまい」

「ない、ないよ、全體どうして然う知れるね」

「おもひ内であれば色が外に現はるゝといふ古臭い文句を用ゐるすとも、先刻から御言葉の端に依つて窺ひました、ところで御約束通り、萬事お打明け遊ばしていただきたい、無論かたく秘密を守ります、御身分に對して猶更ら秘密の點は確實に」

「それでは萬事うちあけて話すがね、かならず世間へ漏してくれては困る」

「大丈夫に思召せ」

「實は斯うだよ、家の足輕筋で當今屋敷の門番に召使つて居るものゝ、その何だ、子にね」

「子とは」

「子とは子さ」

「いや、男の子で御坐いますか、但しまた娘で御坐いますか、其邊しかと、ついでに年は幾何で、男子なら格別、女子ならば容貌の點を委しう、どうか手に取る如く、緻密に願ひます」

「たゞ娘で、分らないかね」

「わかりませんな、娘にも種々さまざま御坐いますから簡單の御一言では甚だ茫として」

「これは困つた、まづその何だよ、賤しいものにしては頗る美な奴で」

「へエ、身分不相應の美人、門番風情の娘にしては惜しい女との思召から、つい如何なさいました」

「や、いちく困らせるな、つい然う思つたのさ」

「さう思つたばかりぢやア御坐いますまい、思つた後に何か遊ばしたらう、ついでに伺ひま

すが、年齢は十八、はゞアなるほど、それでは容色ばかりでなく心が優しうて親孝行で、貴方様が御出入の度には必ず親父と共に罷りいでて、なるほど、板敷へ摺り付ける雪の額際、この寒中に嘸や冷たからう、あゝ可哀さうな女ぢやと思召したのが基とは、何の基で御坐います」

「この度の基さ」

「人にも言ひ難い、さりとして此まゝに打過ぎ難い、事の起りのその基で御坐いますか」

「まづ然うだ、ところでね、そつと人しれず此事の取持を致したものが別にあつて」

「それは怪しからん奴で、もし昔ならば忽ち御家騒動となるべき事を、しかし貴方様のためには月下氷人、爾來さぞ其ものも他に異なつての御最良分で御坐いませうな、愛い奴とか何とか仰せられて」

「なアに、そんな大層な者でない、やはり家に古く召使ひの女で今年六十近い婆アだよ」

「さりとしては戀しりの婆あまり貴方様の思召が激しいから、もしや御病氣でも出ようかと、おのれ一人の呑込顔に御慰樂かたぐ、夜更け人定まつて後そつと御居室へ庭の切戸からお連れ申したのですな、晝燈ほのくらきところに身の賤しきを恥ぢて初心の顔を反けた娘が其時の、えゝ畜生、いやこれは失禮」

「はゞムムムム」

「ところでその娘は、近來いかゞいたして居ります」

「いかゞつて、やはり其まゝ居る」

「いへさ、かりにも下賤の種に生れた身を以て相傳の君の御肌を汚して後は、一入さらには有難く冥加に餘つて御慕ひ申しながらも、思へば末の遂ぐべき戀でなし、なまなかの御情が

却ッて今更ら怨めしいといふやうな、風情が御坐いませうな、なか／＼哀れッほい乙なと  
ころが、いよく御氣に召しましたらう」

「いや、どうも談話が分ッて面白いが、あまり言葉の先を取られるので順序を忘れるよ、暫  
らく黙ッて」

「はッ、さらば謹んで承りませう」

「また何だか變だね」

「決して變ぢやア御坐いません、たゞ思召のほどを御存分に御打明け遊ばして」

「ところでその娘の親父が頗る物堅い四角ばった奴でね、ちらと其事を知ッた後は以ての外  
の立腹で、おのれ勿體ない、戀も戀によれ現在お家の殿様を咬かして、といふやうな事で、  
可哀さうに彼一人の罪でもあるかやうに、さん／＼折檻した上に、いつの間にか遠方の親

類へ預けて仕舞ッたのさ」

「えらい、その門番なか／＼えらい奴ですな、逆も末の遂げない事を知ッて物の大事になら  
ざる前、いや珍らしい男だ、大抵の下司なら是れ僥倖と持ち込んで、よし轉んでも尋常は  
起きないとところを、正直一途に自分の娘ばかりの折檻たア感心々々」

「ひどく褒めるな」

「褒めますとも、わざと娘に淫を賣らせて得意がる親の多い世の中ですもの」

「しかしね、いくら親父が折檻しても無効だ」

「なぜで御坐います」

「孕んだよ」

「おや」

「孕んだから、最早仕方がないさ」

「へエ、いよく孕んだのですね」

「だから誰が何と言つても追ツつかない」

「なるほど、しかしこゝは一事うかゞひますが、私には萬事うちあけて御談話を願ひます、及ばずながら眞實に御爲を存じて申し上げますから、えゝ凡そ幾度ほどその娘を御召しなさいました」

「をかしな事を問ふね、實は先刻いうた婆が、まづ四五度も連れて來たらうか」

「はゝア、ところで其娘に母親が御坐いますか」

「それが甚だ奇だ、委しい事は知らないが、その母と申すもの頗る不埒の女で、彼が七歳のころ外に男を拵へて何處へか出奔したまゝ未だに死生も分らんさうだが、偕その不埒女の

子としては猶更ら」

「へエ、生んだ母親は良人を捨て、遁け去つた姦婦、いはゆる有夫姦なる奴で御坐いますな」

「さうだね、だから親父が律義一片の手鹽にかけて更に母とは雲泥の差、よくあんな女の腹にあんな孝行ものが出來た、などと専ら人が風聞をするさうだ」

「はゝゝゝ誰が其風聞を御耳に入れましたな、まさか娘が自身の口からでは御坐いますまい」

「それは、あの何だ、手曳いたした婆がさ」

「そして、今では娘の居所が知れて居りますかな」

「知れて居る、それも婆が種々さまざまに手を廻して聞き出してくれたのさ」

「なるほど、して親父は矢張り門番を、は、ア、始めから此事に付いて一言も申しませんかな」

「いや何も言はないから猶更氣の毒に思つて、下々の我家來ながら出入の毎に聊か面目ないね」

「ところで全體、貴方様の思召では、その娘を如何なさる御思案で」

「そこだて、迎も仕様がなから、せめて妾として生涯を安樂に送らせてやりたいが、筋目あつて手許に召使ふ侍女の類ならばまだしも、門番風情の娘と人しれず忍び逢つたといはれては甚だ迷惑するのさ、まして他家よりも一倍きびしい家風だから、たとひ言ひ出し、も皆が聞き入れまいと思つて獨り心勞して居るが、加之も今月が八月目で來年の二月が産月のよしだ」

「俗にいふ腹は借物、いづれ御出産の御子様は、直ぐ何とかして御工夫の上お屋敷へ」

「ところが彼なかくの一途女で、たとひ如何なる事があつても手放さぬと申して居るさうだ」

「はてな、そいつは一重絹で無ささうだはい」

「なぜ」

「何故ツて、萬事もう靈骨に申し上げますから御氣に觸へられないで能く、よつと御思案をね、まづ差當つて老爺ならばこゝに六事の不審が御坐います、その第一は、元來いかほどの評判の宜しい娘にもしろ、現在の良人を振り捨て、仇し男と遁け去つた姦婦、いはゞ直接の系統が毒婦の子で御坐いませう、しかも其よろしい親孝行とか利發女とかの評判は手曳した婆どの、評判で、いまだ其他の者より御聞取のない御様子、そこで第二の不審は、其

門番の親父それほど物堅い律義一片ならば、貴方様の御出入毎に自己一人の平伏で濟むべきを、かりにも溢ッ皮の剥けた妙齡の娘を是みてくれに賣物を飾るが如く、わざ／＼引連れて出るとは何のためでせう、實は恐れ多い御目にかゝつては、いけないと。昔氣質の一徹に出る娘を差止めるが當然のところ、どうやら最初から親子とも／＼曰く所以がありさうで御坐いますな、さて第三には手曳した婆どの、年久しう御家に御奉公の身ならば猶更のこと、外に何とか思召を慰むる工夫のあるべきに、ふかい奥向の勤めの身で、忽ち門前の加之も戀は誰しも秘すべき其心情を手に取る如く知つて、御言葉もないに進んでの取持顔、其上しきりに娘の宜しき吹聴、もし疑へば決して清い水でも御坐いますまい、第四には親父が娘を折檻したといふ其折檻の悲哀も外に見たものはなく、矢張り其婆どのが申し上げたでせう、かつまた容易に知れなかつた娘の居所を種々さまざまの苦勞して聞き出

したのも婆、そも／＼自分が出掛ける筈はなし、何者を使つて何ういふ工合に探し出しましたか、是また念を推すべき一事、第五には妊娠です、なるほど一度でも孕むものは孕みませうが、まづ十七ぐらゐの處女で怖る／＼人目を忍んで僅に三四度の御伽したばかりで、忽ち飴細工のやうに膨れ出すといふ事、いや決して無いとは申しませぬが、めづらしい方で、もしや月日の點を指折り數へて何か御不審は御坐いませんかな、第六には、その娘いかに貴方様をお慕ひ申せばとて、いはゆる提灯に釣鐘、下賤の身の辻も末遂けぬ戀とは知つて居ります筈、ついでには出産の御子様を賤しき我子に育て、名もないものにするよりは、たとひ現在の貴方様が構はぬ知らぬと仰せられても、あくまで泣き争つて御屋敷へ入れたいのが全くの情愛といふもの、それに何ぞや、いかなる事あつても手放さぬなどと生まぬ前から強情を張るは聊か評判の優しい才女には似合はぬ始末、もしや御子様を鑑に



猶も御縁の絲目を繋いで邪魔のない處へ御呼び寄せ申した上、こまかくの仔細ある企謀では御坐いますまいか、全體その娘を預つて世話介抱をする家が門番の親父に取つて何の因縁か、その邊の御穿鑿も肝要、すべて物の成行が、前後不揃ひのやうに考へますからな、は、失禮ながら何事も殿様風を離れて遊ばさないと、飛んでもない僅の小事から御家騒動は古今ある凡例、いッそ今のうち其娘を御呼取あそばして眼前で出産の後、門番の親父もろとも思召の賜物で断然お暇になすつたら如何で御坐いますな、出来た事は致方もないからと、御親類や御家來衆の喧しいは覺悟の前で」

きくや否や殿様なンにも言はず其まふいと出で行かるは、いさゝか主人の言葉が御意に召さぬ體、こりやくと門前の車夫を呼んで草履を直させながら、あとも見返らで立去る後影、よほど娘の味が五體に染み込んで忘れぬと見えたり、をりしも引違へて入り來りし二

十五六の小男は、顔の艶てかくと光つて安香水の香ふンくと薫らせつゝ、なさけなや風ふく毎に漣をうつ小紋縮緬ベンべらの薄羽織しかも染め返しの三紋を一著して、日高川清姫の形見めいたる鱗形の綿襦袢を帯に、さぞや時計が欲しからうに生憎手に入らねば、おほん日本一の都會に住みながら野暮な時間沙汰でもけエすまい、どこの店前を覗いても時計は正直ですといひたけの顔色、あやしけなる口綿の小袖に下著は古代更紗を欺く眞岡染、觀光縮緬とかやいふ空色の縹緞ちらく、現はして、質苜蓿の革鼻緒つけたる兩ぐりの駒下駄、久留米の裁屑でもあるまじけれど、紺飛白の足袋、洋服店の番頭に親類を持つ次第にあらざるべきも外套縞の烏打帽、心の底から身の風俗まで嘘で固めて世を渡る動物、臆面もなく其日其日の半日を女穿鑿に暮して、兎角うき世は何とやらと妙な手付をしながら大通を氣取る奴なり、

「や、これは老先生、はじめ御意を得ますが、御年末さぞ御繁忙とは世間普通の挨拶、すうと拙が見た御住居の御様子ぢやア、およそ人間のする事さうざつばら爲つくした果で、あゝでもない斯うでもないといふ御趣向が所謂例の廣告文と吹き出ましたな、お差支なれば茲に嘴の黄色い雄羽一匹どうか、宜しなに御説法のほどを願ひます、へゅゅ」

「否、ながくさやうな至つた義では御坐いません、たゞほんの一時」

「などと仰せられて敵の油断を見澄まし、づどんと一發、胸の邊をまるる御心ですな」

「これは怪しからん事を」

「で御坐いますか、や、失禮千萬、時に伺ひますが、今年の暮は例年に比して如何なものでけせうな、世間一帯の景況が」

「わかりませんな、不景氣々々々の聲に聞きましたも、あはれその不景氣が響くほどの身代

でも御坐いませんから、高木は常に風をうけて根本の雑草いたづらに知らざるが如しの比喩で」

「高木が風に吹かれて雑草さらに關せざる如しなア、當意妙の金言至言、奇語珍語、いや恐れ入りました、では恐れついでに寧ろ恐れけもなく、また一事こゝに伺ひたき義が」

「ちよいと御待ち下さい、時に貴方は」

「名があるほどの蟲ぢやアけエセンから、たゞ斯の如く不思議の音を發するばかりの者と、思召しわけて何卒このまゝ」

「は、アなか／＼謙遜家で在らっしゃいますな」

「こいつ劔難の相は御坐いませうが、謙遜などといふ立上つた高尙の言を賜はるもんぢやアけエセン、たゞ世の中を何となく、自暴すましに濟ましきツて」

「なるほど、世は悉く濁れり我たゞ獨り澄めりといふ意味ですかね」

「なアに動いて淀ますほどの勢力がないといふこつてす、あれば是でも人間の數に漏れやすまいが」

「いちく、皮肉な何せですな、枯木の野暮漢、何ともはや御挨拶に困ります、どうか平凡に世俗に要點のみの御話しを願ひたい」

「お言葉でけすが、俗の俗なるもの凡の凡なる拙などの駄言蕪辭を」

「いやそれが既に無用の言です」

「無用」

「はい無用ですな、もしその無用をお去り下さらない以上は、お相手になりますまい、しかし御寛體と」

いひつゝ主人の翁は起つて別の一室に入りしまゝ、待てどもく更に出て來らず、さすがの大通先生しよんほりと取残されて、居るにも居られず歸りもならねば、進退こゝに谷まり半泣きの面を皺めて幾度か襖越に聲かくれど、たゞ閑として音なきのみか、やがて晝飯の膳に對ひしと覺しく、焼鳥の匂ひ蒸着の馨ふんと鼻を衝き來つて獨酌の舌うち鳴らす體、やアたまらぬ生命大事と躍り上つて逃げ出せば、凜たる筑波おろしの風は叫ぶが如き音を立て、面をうち、おもはず脚を縮めて胴震ひする折しも、横合の田甫途より物に驚いて一文字に驅け來る犬に向脛を噛み付かれ、わつと立てし悲鳴のみぞ此男が今日の眞實なりける、

# 浪六全集 第拾貳編終

大正七年十一月三日印刷  
大正七年十一月八日發行  
大正七年十一月十五日再版

大正八年五月十五日三版  
大正八年八月十日四版  
大正九年三月五日五版  
大正十年二月一日六版

浪六全集第十二編

定價金貳圓



著者

村上

信

發行者

加島虎吉

印刷者

小川三郎

印刷所 凸版印刷株式會社分工場

發賣所

東京市日本橋區  
本石町三丁目  
東京市日本橋區  
人形町通住吉町  
東京市本郷區  
本富士町二番地

電話本局長三六六番二一六七番  
振替口座東京一七四四番  
電話本局一七四九番  
振替口座東京一六三六番  
電話下谷二五〇二番  
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店  
至誠堂第一分店  
至誠堂第二分店